

愛知学院大学

教養部紀要

第72巻 第1号

論文

山 口 均：『荒地』の原風景…………… (1)

山 名 賢 治・中 野 博 文：ルイス酸存在下でのトリアルキルホスファイトの
I-フェニル-1*H*-ピロール-2,5-ジオンへの1,4-付加反応による 2 量化反応…………… (21)

Masamichi WASHITAKE：Systemic Functional Linguistics as a Useful Tool for Analyzing Text (Part 4)
…………… (27)

2024

愛知学院大学教養部

『荒地』の原風景

山 口 均

キーワード：20世紀イギリス詩、T. S. エリオット、エビグラフ

初めに

「『荒地』は複数ある。」

これは『荒地』 *The Waste Land* 発表100年を記念して日本 T. S. エリオット協会が企画刊行した論集『四月はいちばん残酷な月』巻頭の日本語訳に付けられた解説文中の一文である。同書編者の一人である佐藤亨による（日本語訳も佐藤）。確かに、*textual history* の視点からみると『荒地』はとても複雑な形で世に出されている。まず検討すべきは、ほぼ同時進行的に進められた文芸誌 *The Criterion* と *The Dial*、次にこちらも同時進行と言える書籍版の Boni & Liveright 版、そしてやや遅れて出された Hogarth Press 版であろう。

Donald Gallup の *A Bibliography*、あるいは Christopher Ricks & Jim McCue の *The Poems* を丁寧に読み解けば、上述の4つの版のそれぞれの形は何か思い描くことができる。例えば、エビグラフはアメリカで発行された *The Dial* 誌にはあるがイギリスの *The Criterion* 誌では存在しない。「自注」「Notes」が付けられたのは Boni & Liveright 版以降のことである。それ以外にも、*The Dial* では「第一部 死者の埋葬」とか「第四部 水死」という、「第一部」「第四部」などを表すローマ数字が付けられていない。「物語的」「階層的」な作品というよりは、「5つの詩」が何気なく並べられているかのような様相を見せている。

このように初出の段階で『荒地』はいずれも「表情」が異なっていたのである。今回、アーカイヴを利用して上述の版を復元することができたので（Hogarth Press 版は部分）、「複数の

『荒地』を提示して、表情の微細な差異に注目しながら、なぜ *The Criterion* ではエピグラフがないのか、なぜ *The Dial* では各部に数字が付けられていないのかなど、その理由も探してみたい。

複数の『荒地』

まず「複数の『荒地』」を「視覚化」してみる。

	Date of issue	Pages	Size (cm) ca.	Epigraph	Dedication	Notes	Line numbers	Part numbers	Copyright/ Publication announcemnet	Circulation/ Copies
<i>The Criterion</i>	1922/10/14 ca.	15 (total 104)	15 × 23	×	×	×	×	○	×	600
<i>The Dial</i>	1922/10/28 ca.	13 (total 117)	16 × 25	○	×	×	×	×	○	9,500
Boni & Liveright	1922/12/15	1+64 (text 41 +notes 12)	13 × 20	○	×	○	○	○	×	1,000
Hogarth Press	1923/9/12	1+35 (text 21+notes 8?)	15 × 23	○	×	○	×	○	×	460

いくつか補足をしておくと、まず「発行日」だが、特に雑誌の場合は実際に書店店頭に並べられた日付の正確な特定が難しいので、これも *A Bibliography* や *The Poems*、そして Lawrence Rainey の *Revisiting The Waste Land* などを参照して一応の発行日とした。

The Criterion にはエピグラフがないことは先述した通りだが、やはり *The Dial* では「第一部」などを表すローマ数字が付けられていないことが目を引く。このことは従来あまり論じられてこなかったように思う。

自注が付けられたのは書籍版の Boni & Liveright 版以降のことで、同じ書籍版でも Hogarth Press 版では自注は付けられていながら「行数」が割愛されるという中途半端な状態になっている。例えば第三部「火の説教」の全139行には計18行に対して注があるが、照合に一苦勞することになる。

さて、ここで当該の4つの版を、より「視覚的」に提示してみたい。次の図版は、第一部「死者の埋葬」のそれぞれ冒頭頁である。*The Criterion* (Vol. I, no. 1, October 1922)、*The Dial* (Vol. LXXIII, no. 5, November 1922)、Boni & Liveright 版、Hogarth Press 版の順で、アーカイヴの URL は本稿の注に掲載してある。なお、書籍版の二冊については、エピグラフが別頁に印刷されていて、これも表情の違いにつながるので図示しておくことにする。

THE WASTE LAND

By T. S. ELIOT

I. THE BURIAL OF THE DEAD

APRIL is the cruellest month, breeding
Lilacs out of the dead land, mixing
Memory and desire, stirring
Dull roots with spring rain.
Winter kept us warm, covering
Earth in forgetful snow, feeding
A little life with dried tubers.
Summer surprised us, coming over the Starnbergersee
With a shower of rain; we stopped in the colonnade,
And went on in the sunlight, into the Hofgarten,
And drank coffee, and talked for an hour.
Bin gar keine Russin, stamm' aus Litauen, echt deutsch.
And when we were children, staying at the archduke's,
My cousin's, he took me out on a sled,
And I was frightened. He said, " Marie,
Marie, hold on tight." And down we went.
In the mountains, there you feel free.
I read, much of the night, and go south in the winter.

What are the roots that clutch, what branches grow
Out of this stony rubbish? Son of man,
You cannot say, or guess, for you know only
A heap of broken images, where the sun beats,
And the dead tree gives no shelter, the cricket no relief,
And the dry stone no sound of water. Only

59

THE DIAL

NOVEMBER 1922

THE WASTE LAND

BY T. S. ELIOT

*Nam Sibyllam quidem Cumis ego ipse oculis meis
vidi in ampulla pendere, et cum illi pueri dicerent:
Σιβυλλα τι θύεις; respondebat illa: ἀπο θανάτι θύω.*

THE BURIAL OF THE DEAD

April is the cruellest month, breeding
Lilacs out of the dead land, mixing
Memory and desire, stirring
Dull roots with spring rain.
Winter kept us warm, covering
Earth in forgetful snow, feeding
A little life with dried tubers.
Summer surprised us, coming over the Starnbergersee
With a shower of rain; we stopped in the colonnade,
And went on in sunlight, into the Hofgarten,
And drank coffee, and talked for an hour.
Bin gar keine Russin, stamm' aus Litauen, echt deutsch.
And when we were children, staying at the archduke's,
My cousin's, he took me out on a sled,
And I was frightened. He said, Marie,
Marie, hold on tight. And down we went.
In the mountains, there you feel free.
I read, much of the night, and go south in the winter.

Copyright 1922 by T. S. Eliot. An edition of *The Waste Land* with annotations by Mr Eliot will presently be issued by Boni & Liveright.—The Editors.

THE WASTE LAND

BY

T. S. ELIOT

"NAM Sibyllam quidem Cumis ego ipse oculis meis
vidi in ampulla pendere, et cum illi pueri dicerent:
Σιβυλλα τι θύεις; respondebat illa: ἀπο θανάτι θύω."

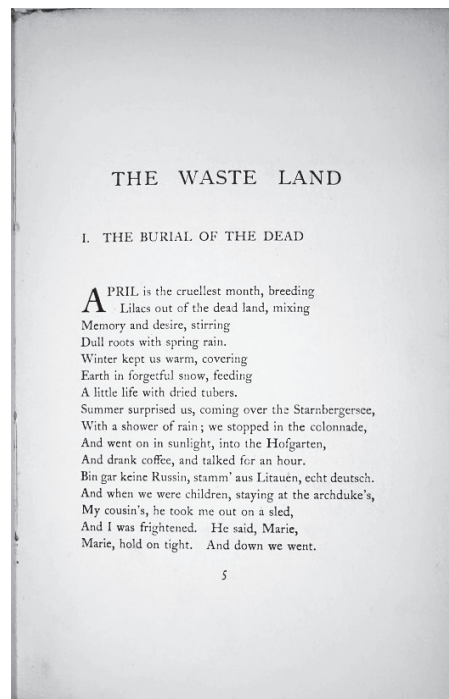
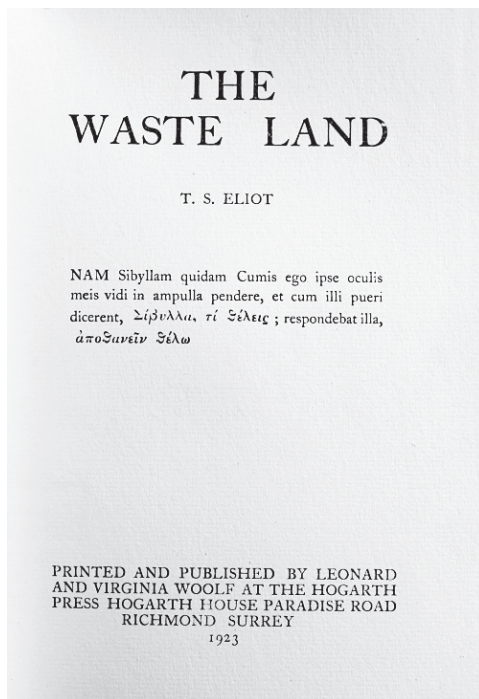
NEW YORK
BONI AND LIVERIGHT
1922

I. THE BURIAL OF THE DEAD

APRIL is the cruellest month, breeding
Lilacs out of the dead land, mixing
Memory and desire, stirring
Dull roots with spring rain.
Winter kept us warm, covering
Earth in forgetful snow, feeding
A little life with dried tubers.
Summer surprised us, coming over the
Starnbergersee
With a shower of rain; we stopped in the
colonnade,
And went on in sunlight, into the Hof-
garten,

[9]

10



どうだろうか、「『荒地』は複数ある」が実感できるのではないだろうか。

順に若干の注釈を加えたい。まず *The Criterion* だが、『サテュリコン』から採られたラテン語とギリシア語が入り混じったエピグラフが付けられておらず、ある意味自然に詩が幕を開けられている。次に *The Dial* だが、冒頭に限って言えば多分この版が現在私たちの思い描く『荒地』の形にもっとも近いのではないだろうか。タイトルがあり、作者名、エピグラフと続き、その後100年にわたって文学世界を揺り動かしてきた434行の長詩が始まることになる（従来「433」行とされてきたが、『四月はいちばん残酷な月』の編集方針に従って「434」行とする）。たまたまの頁組の結果だろうか、第一部「死者の埋葬」冒頭18行がまとまりよく一頁に収まっている。“April is the cruellest month...”と始まるこの18行は、以降、世界の読者を「驚かせて」いくことになるが、同時に「複数の声」「different voices」へと細分・細断されることになる。このことは別稿で論じたことなので繰り返さないが（「『死者の埋葬』冒頭18行再読」、『四月はいちばん残酷な月』）、1922年10月に *The Dial* を手にしたアメリカの読者たちはおそらくこの18行をごく普通にひとまとまりの一連として享受したのではないだろうか。

さて、*The Dial* 版の最初の頁では二つ目を引くことがある。一つは、頁下部の編注で、著作権情報と並んで、この詩が近日中に Boni & Liveright 社から書籍版として出版され、そこには

詩人自身による「注解」“annotations”が付けられることになる」と告知されている。Boni & Liveright 版は1922年12月15日発売で、書籍版なので *The Dial* 版よりもひと月少々遅れているが、実際は同時進行的に企画が進んでいたようで、このアメリカでの二つの版は「競争関係」というより「共存関係」だったことが分かると思う（なお、『四月はいちばん残酷な月』の発行は2022年12月15日）。

もう一つは、先述したように「第一部 死者の埋葬」「第二部 チェス遊び」というような五部構成を明示するローマ数字が付けられていないことである。“THE BURIAL OF THE DEAD”、“A GAME OF CHESS”とタイトルだけが並べられている。今でこそ、読者は『荒地』を物語的・階層的な作品として読んでいるが、*The Dial* 版の、つまり少なくともアメリカにおける『荒地』の最初の読者は、長さも違えば内容もつながりを欠いたいくつかの作品が、あたかも *Selected Poems* のように並べられている感覚で読んだと思われる。

こうなった直接の理由ははっきりしている。エリオットが *The Dial* 誌に送ったタイプ原稿にローマ数字が付けられていなかったこと、そして著者校正を経ていないためである。ただ、それはあくまでも外在的な理由であって、ではどうしてエリオットはパートナンバーの付いていないタイプ原稿を作成させたのか、多分その原稿自体は確認していると思われる。先ほど、『荒地』は物語的・階層的な一連の詩行から出来上がっているという今の読者の共通理解について述べたが、実はエリオットはもう少し「ゆるい作品群」として構想していたのではないだろうか。パウンドの校閲を経たエリオットが、「ゲロンション」“Gerontion”を序詩として付けてみましようとか、第四部はまるまる削除するのはどうでしょうか、Boni & Liveright 版で一冊の本としては分量が足りないと言われて、現在の自注ではなく、数編の未発表の作品を最後に並べるのはどうかと提案したりしたこともその傍証となるのではないだろうか。

「エピグラフ、パートナンバー、行数表記、自注」は Boni & Liveright 版で初めて揃い踏みをすることになる。ただ、アーカイヴから復元したものを実際に見てみると、いくつか気になる点があるので指摘しておきたい。まずエピグラフだが、復元画像から分かるように *The Dial* 版はタイトル、作者名、エピグラフ、そして詩の本文がいわば地続きになっていて一体感をもって読むことができる。ところが、Boni & Liveright 版は書籍という形式もあって、読者が“April is the cruellest month...”に到り付くまでが結構遠いのである。まず、“THE WASTE LAND BY T. S. ELIOT”と書かれた表紙（ダストカバー）には「1922年度 *The Dial* 賞受賞者」と大きく書かれ、「これは優秀な若手作家に与えられる賞で、賞金は2000ドルです」と告知されている。そしてダストカバーの折り返しには、当時 *New York Tribune* 紙の編集者であった批評家 Burton Rascoe の早々とした『荒地』評（1922年11月5日付同紙）の抜粋が載せられ、『荒地』はこの時代でもっともすぐれた詩である」と激賞されている。読者はこういう前口上を聞かさ

れて、さらに数枚の白紙頁を経てやっとエピグラフに向き合うことになる。ところがこのエピグラフから詩の本文までは、著作権情報や再び白紙頁などまた3頁を跨ぐことになる。*The Dial* 版の連続性と異なり、まるで別々の建物のような感覚すらする。

もう一つの問題は、書籍としてはかなり小型の造本になっていて、要するに小さいのである。そのため、本来は1行であるものが1行に収まらないことになる。例えば、第一部「死者の埋葬」のll.19-20は他の版ではこう組まれている。

What are the roots that clutch, what branches grow
Out of this stony rubbish? Son of man,

ところが、Boni & Liveright 版では判型の制約から頁組はこうなっている。

What are the roots that clutch, what
branches grow
Out of this stony rubbish? Son of
man,

エリオットは Boni & Liveright 版が一番校訂がしっかりしていると思っていたようだが、この「はみ出し」については不満を述べている。“what branches grow”が“what / branches grow”となるのも不自然だが、“Son of man”が“Son of / man”となってしまうのも不自然極まると言えよう。この「人の子よ」には（初めての）自注が付けられており、この言葉がエゼキエル書二章一節から採られていることが知られるならば一層である。どうして“man”という短い単語一語が収まり切れなかったのか。それは、行の右端に“20”という行数表示を入れる必要があり、活字組の文字送りに余裕がなくなったからである。

さて、Hogarth Press 版では自注は付けられていながら「行数」が割愛されているという何とも中途半端な体裁になっている。どうしてだろうか。1919年に『1920年詩集』*POEMS 1920*の核となる *POEMS* が Hogarth Press 社から出されているが、こちら同様に『荒地』も印刷はウルフ夫妻による手製印刷であり部数も限定された「美麗本」なので、Boni & Liveright 版の不体裁を見たウルフ夫妻が、自注は付けながら行数は付けないという決断をしたのではないだろうか。もう一つある。それはエリオットが後年述べているように、エリオット自身が自注が本当に必要かどうか迷っていたことである。

なお、Hogarth Press 版は Boni & Liveright 版を参照してウルフ夫妻が新たに組版をしたもの

なので数か所の誤植があり、エリオット自身が版本に訂正を書き加えている。ll.60-63 はこうなっていた (emphasis added)。

Unreal City,
Under the brown fog of a winter dawn,
A crowd flowed under London Bridge, so many,
I had not thought death had undone so many.

もちろん、“A crowd flowed over London Bridge...” なのだが、ウルフ夫妻も死者の一群がロンドン橋の「上を流れていく」とは思いもよらなかったであろう。

以上、ほぼ同時並行的に世に出された「4つの『荒地』」を眺めてみると、それぞれ思いのほか表情が異なっていたことが分かると思う。

エピグラフの諸問題

さて、ここからはあらためて *The Dial* 版に初めて付けられて今日に到るエピグラフの問題を考えてみたい。三点ある。一つは、パウンドが難色を示したことで採用されなかったコンラッド『闇の奥』(*Heart of Darkness*, 1899) からの一節、次に現行の『サテュリコン』の一節、そして、*The Criterion* ではエピグラフが付けられていない理由である。

『闇の奥』の一節については何度も論じられてきたことであり、『四月はいちばん残酷な月』の巻末にある「T. S. エリオット 1922年ビフォー&アフター」(松本真治) に簡潔に経緯がまとめられているし、稿者自身も論じたことがあるが(「エピグラフという境界——T. S. エリオットの場合」、『境界線上の文学』)、新視点がないわけではないので今一度整理してみる。

彼〔クルツ〕は完全な知識を手にした果てに、欲望と誘惑と敗北にみちた自分の人生をもう一度念入りに生き直したのだろうか。何かの姿、何かの幻に向かって彼は二度小さく叫んだが、それは吐息のような叫びだった。「恐ろしい、恐ろしい。」(*The Waste Land: A Facsimile* 3)

どうだろうか、『荒地』434行に長い間首まで浸かってきた私たちにとって、現行の『サテュリコン』の巫女シビルの「私は死にたい」と並べた場合、果たしてどちらがより「説明的 (“somewhat elucidative”, *Letters* 1 629)」なのだろうか。「あったかもしれないこと (“what might

have been”）」と「あったこと (“what has been”）」を現在の地点から比べることは慎むべきかもしれないが、稿者はやはりコンラッドを選びたい。後述するが、『サテュリコン』の巫女シビルの言葉は神話のエピソードをなぞっただけで、幾分「軽い」のである。深い底から響くような『闇の奥』の「男声」から、か細い「女声」へとある意味劇的に変更されたことの効果は考えてみる余地があるはずだが、これは『荒地』第一部冒頭18行を再考した拙稿を参照していただきたい。

コンラッドについてはもう一つ指摘しておきたいことがある。それは、『荒地』が発表された時点で彼は現役の作家であり、前年には英米で個人全集が出回るようになり、小説が舞台化・映画化されるなど、当時同時代的にとってもポピュラーな存在だったということである。1922年11月、つまり『荒地』が *The Criterion* 誌に掲載された翌月には、以前出版した『シークレット・エージェント』*The Secret Agent* というスパイ小説を自ら脚色して舞台化している。原作は「爆破テロ小説」とも呼ばれる1907年出版の作品だが、ロンドンのアンバサダー・シアターで上演され、1936年のアルフレッド・ヒッチコック監督の『サボタージュ』を始め何度か映画化されている。また、翌1923年には海洋冒険小説とでも呼ぶべき『放浪者 あるいは海賊ペロル』*The Rover* を発表している。

エリオットがこだわった『闇の奥』からの一節にパウンドが反対した理由はよくわからない。1922年1月（28日付と推定）の書簡では、「コンラッドからのエピグラフはお好きにどうぞ、私はコンラッドに月桂冠を出し渋るほどの者ではないから」(*Letters* 1 630) とやや投げやりに書いているが、あらためて考えてみると活躍中の流行作家であるということで難色を示したのかもしれない。コンラッドは『荒地』発表後も作品を出し続けたことを考えると、もしエピグラフがコンラッドのまままだとしたら、何かその後の『荒地』の読み方の方向性が変わってしまったのではないだろうか。

コンラッドについてはあと一つだけ述べておきたい。彼は1924年に亡くなっていて、エリオットが *The Criterion* の手本とも考えていた『フランス新評論』*La Nouvelle Revue Française* は同年12月に追悼号を出している。それで気付いたことがある。*The Hollow Men* は、それまでばらばらに発表されてきた短詩が1925年になって一つにまとめられたものだが (*Poems* 1909–1925)、この作品はいわば「ダブルエピグラフ」というほかにない形をしている。第一エピグラフは“*Mistah Kurtz—he dead*”、第二は“*A penny for the Old Guy*”である。別な論考となるので詳細は述べないが、二つ目のものは17世紀初めの「火薬陰謀事件 (“Gunpowder Plot”）」で英国国会議事堂の爆破を計画して失敗し処刑されたガイ・フォークス (Guy Fawkes) のことで、11月5日が英国で「ガイ・フォークス・ナイト (“Bonfire Night” とも言う)」として藁人形に火を付けて練り歩く「お祭り」になっていることはよく知られている。

最初のもはコンラッドの『闇の奥』からの引用であり、『荒地』で採用されなかった前述の箇所ですぐあとに見られるもので、黒人少年がクルツの死を伝えに来た時の言葉である。実を言うと、『The Hollow Men』は（も）何がどう書かれているのかがとてもわかりにくい作品なのだが、全体的な「うつろな」雰囲気だけが好まれているようで、以前論じたように特に映画作品の中で「引用」されることが多い（『映画の中のエリオット』、*T. S. Eliot Review*, No. 27, 2016）。

さて、エピグラフの問題に戻る。*Poems 1909–1925*をアーカイヴで確認すると121頁に“The Hollow Men 1925”とのみ書かれた一葉があり、白紙の1頁を挟んで詩の本体は123頁から始まる。第一エピグラフは121頁、第二エピグラフは123頁に詩のタイトルの後に置かれ、そこから“We are the hollow men / We are the stuffed men”と始まることになる。そうすると、やはり詩の本体に繋がるエピグラフは二つ目の“A penny for the Old Guy”なのではないだろうか。では、第一エピグラフ“Mistah Kurtz—he dead”はなんだったのかというと、稿者はこれまで、やはりエリオットは『闇の奥』に拘泥し続けていたのであろうと考えていて、それもあるだろうが、今回気付いたことは、これは前年に没したコンラッドへの追悼だったのではないだろうかということである。“Mr Conrad—he dead”の意である。

次に『サテュリコン』からのエピグラフの問題に移りたい。要点は二つある。一つは、『サテュリコン』の一節はすでに『荒地』の全体的な雰囲気を知っていることを前提にして巫女シビルの「私は死にたい」のみが前景に出されることが多いが、それは正しいのか、もう一つは*The Criterion*にはこのエピグラフが存在しない理由の推測である。

ただ、その前に、多分これまで一度も論じられたことのない問題について触れておきたい。それは、『荒地』を読む欧米語圏の読者と、本稿では日本語圏の読者を想定するが、それ以外の言語圏の読者、この両者の作品受容の差異である。分かりやすいように、エピグラフを含めて冒頭の「原風景」を示しておきたい。

『荒地』

じっさいわしはこの眼でシビュラが瓶の中にぶらさがつとるのを、クーマエで見たい。子供がギリシア語で彼女に「シビュラよ、何が欲しい」と訊くと、彼女はいつも「死にたいの」と答えていたものさ。

第一部 死者の埋葬

四月はいちばん残酷な月
死んだ土地からライラックを育て
記憶と欲望をまぜあわせ
春の雨で生氣のない根をかき乱す

このように、『荒地』は始まる。『サテュリコン』は国原吉之助訳（岩波文庫）、冒頭は『四月はいちばん残酷な月』巻頭の佐藤亨訳を使用した。「荒地」という寂し気なタイトルは何を言おうとしているのか、「死者の埋葬」とあるが誰が死ぬことになるのか、などの疑問を抱きつつ詩の世界に降りていくことになるが、それなりに地続きに読み進めていくことは難しくないと思う。

これが英語版ではこうなる。

THE WASTE LAND

“Nam Sibyllam quidem Cumis ego ipse oculis meis vidi in ampulla pendere, et cum illi pueri dicerent: *Σίβυλλα τί θέλεις;* respondebat illa: *ἀποθανεῖν θέλω.*”

I. The Burial of the Dead

April is the cruellest month, breeding
Lilacs out of the dead land, mixing
Memory and desire, stirring
Dull roots with spring rain.

欧米語圏の一般の読者で、このエピグラフをこのままで理解できる層はどの程度いるのだろうか。例えば、ラテン語の部分で“respondebat”などは現代英語の語彙に繋がるものなのでそれなりに意味は推測できるかもしれないが、ギリシア語の部分は知識がなければ文字自体が読めないと思われる（知人のイタリア人に、たまたま携行していた詩集でこのエピグラフを見せたところ、「普通に読めます」とのことだった。知人によればイタリアでは中学高校でラテン語6年間、古典ギリシア語が3年間必修とのことだったが、これは稀有な例ではないだろうか）。当然のことながら、エピグラフはその内容がそれなりに把握できてこそパラテキストとして機能することになる。そうすると、この場合肝心の「私は死にたい」という箇所が分から

なければ、単に意味のない「記号」が並べられているだけのこととなって、そのまま「四月はいちばん残酷な月」と始まることになる。この受容の差は大きいと思われるがどうだろうか。問題提起としておきたい。

『サテュリコン』自体に戻りたい。エピグラフの当該部分を『サテュリコン』全体から詳細に考察しようとする研究もないではないが（Jewel Spears Brooker and Joseph Bentley, *Reading The Waste Land*, Russell Elliott Murphy, *Critical Companion to T. S. Eliot* などが詳しい）一般的にはエピグラフ最後の「私は死にたい」という不死の身という定めを嘆くシビルの言葉のみが前景化されることが多い。しかし、先述したようにここは長編風刺小説『サテュリコン』の一章「トリマルキオの饗宴」と題された成金大富豪トリマルキオ邸での宴席でのどたばたの一部であり、実際は無学なトリマルキオが語る「ほら話」である。冒頭の“nam”は訳されないことも多いが、これは「じっさい」という、直前の言葉を強調する意味だと思われる（国原吉之助『古典ラテン語辞典』大学書林）。トリマルキオは、読んでもいないホメロスの「キュクロポスがオデュッセウスの拇指をやっとこでねじまげた話」（国原訳）などを持ち出して学識を自慢しているのである。このキュクロポスがオデュッセウスの指をねじまげたというエピソード自体が存在しないので、この前後まったくのほら話であることが語り手によって強調されている。「じっさい」は、ほらにほらを積み重ねるためのつなぎの言葉なのである。そして“ipse oculis meis vidi”（自分の目で見たよ）と続けるのだが、もちろん誰も信じない。だから、このシビルの話も食卓に巨大な豚の丸焼きが出されると突然打ち切られそれきりとなる。『荒地』のエピグラフはこういう文脈の中の一節だった。もちろん「私は死にたい」という言葉自体にはそれなりの衝動力はあるだろうが、それが「ギリシア文字」という薄膜に覆われていることも確認しておきたい。

このように『サテュリコン』から採られたエピグラフは、それが選ばれた過程自体もまだまだ考察の余地があるように思うが、それ以上にエピグラフの内容が従来表面的に受け止められてきたようなものとは異なることも指摘しておきたい。ただ、そのようなエピグラフではあるが、『荒地』のパラテキストとしてそれなりの機能を果たしてきたことも否定できない。そうすると考えてみたいのは、「複数の『荒地』」の中でなぜ *The Criterion* 版にはエピグラフが欠けているのか、ということである。「欠けている」という書誌的な事実自体はどこでも指摘されていながら、「なぜ」なのかという視点はこれまで論じられたことがないように思う。

言うまでもなく、*The Criterion* はエリオット自身が創刊して編集に携わった雑誌である。当然、校訂校正にも最大限の目配りをしているはずである。*The Dial* の方は海を隔てているものの全体的には編集に満足していたが、さすがに微細な箇所は意に染まないこともあったようだ。シビルの言葉「私は死にたい」は当然“ἀποθανεῖν θέλω”なのだが、目を凝らすと *The Dial*

では“ἀπο θαυεῖν θέλω”と誤っていて、きちんと指示したはずなのに、とエリオットは不満を述べている。それほどなのに *The Criterion* の『荒地』にはエピグラフが存在しない。この号で『荒地』は50頁から始まり最後は64頁目になるが、誌面的には余裕があり頁組の都合ではなさそうだと。

大胆な「仮説」を提示してみたい。それは、*The Criterion* の印刷を引き受けた印刷所がギリシア文字の活字を用意できなかったからではなかろうか。

それでは、その印刷所はどこなのだろうか。これまで『荒地』研究でほとんど語られたことのない視点だと思う。アーカイヴで確認すると、表紙には“PUBLISHED BY R. COBDEN-SANDERSON”とある。リチャード・コブデン=サンダーソン (Richard Cobden-Sanderson) はエリオットが *The Criterion* を立ち上げるにあたって知遇を得た出版業者であり、以後長く交友を続けることとなった。実は、コブデン=サンダーソンは父親の T. J. コブデン=サンダーソンの方がイギリス出版印刷史では名前をよく知られている。それは、「プライベート・プレス」の雄だった Doves Press の共同経営者だったからである。Doves Press は独自の活字を鋳造して人気を博したようで、Doves Bible などが知られている。ただ、T. J. コブデン=サンダーソンはその後共同経営者と仲たがいをし、鋳造した活字をすべてテムズ川に投棄してしまったので、リチャードに受け継がれることはなかった。

さて、エリオットは1922年だけでもリチャード宛に32通の手紙を書いていて、*The Criterion* 創刊の準備を念入りに進めていたことがうかがわれる。同年9月27日付の手紙では、委託した印刷所が『荒地』第一部についていくつか勝手に表記を変えてしまっていると不満も述べている。私たちは、今でこそ『荒地』はこういうものだと思っているが、最初のタイプ原稿を見ただけの印刷工は多分「常識的な訂正」を施したのであろう。

ではその印刷所はどこかという点、ローレンス・レイニーの *The Annotated Waste Land with Eliot's Contemporary Prose* に未発表の手紙について記述があり (F. S. Flint 宛、1922年9月22日付)、それにより Hazell, Watson & Viney 社であったことが知られる。同社は1839年の創業になる老舗の印刷所で、かなり手広く印刷業務を請け負っていたようだ。工場内で自動活字鋳造植字機である Monotype に向かう女性植字工が居並ぶ写真 (1912年) も残っている。それほど印刷所にギリシア文字の活字がなかったのか、というのは当然の疑問である。それは「需要」がなかったためではないだろうか。エリオットが使用した Loeb Classical Library は米国ではハーヴァード大学出版局、英国ではハイネマン社が出しているが、そういう学術書出版社に比べて、Hazell, Watson & Viney 社が印刷した書籍を見ると、チャールズ・ディケンズ全集や児童書などがあり、ギリシア文字が必要になることはなかったと思われる。イギリスの印刷出版の歴史を調べてみると、ヘブライ文字と並んでギリシア文字は常備する負担が大きかったよう

だ。当然のことながら、フォントサイズの異なる活字もすべて揃える必要があった。

さて、「悪魔の証明」という言葉がある。ある事物ある事象が「存在する」ことは証明できても、「存在しない」ことを証明することが至難の業であることを言う。1922年の時点で Hazell, Watson & Viney 社にギリシア文字の活字がなかったのではという稿者の「仮説」も、同社が手掛けた当時の印刷物にギリシア文字が見つければ即座に霧消することになるが、それを恐れずに考察を重ねたい。

「傍証」を示してみる。パウンドの *Cantos* で「初期詩篇」とも呼ばれる最初の30篇のうち Canto 8から Canto 11は15世紀イタリアの領主であり傭兵隊長でもあったシジスムンド・マラテスタ (Sigismund Malatesta) の経歴を軸としていて、「マラテスタ詩篇」“Malatesta Cantos” と呼ばれている。この4篇の初出が *The Criterion* だった (Vol. I, no. 4, July 1923)。Canto 8は次のように始まる (*The Criterion* では“Canto 9”となっていて、その後番号が変えられた)。

These fragments you have shelved (shored).

“Slut!” “Bitch!” Truth and Calliope

Slanging each other sous les lauriers:

That Alessandro was negroid.

しかし、*The Criterion* 掲載時にはこの冒頭数行は削除されていた。エリオットが難色を示したからである。理由は容易に推測できよう。

さて、その *The Criterion* 版の Canto 8をアーカイヴで確認していて次の箇所でわずかな違和感を持った。その「違和感」が浮き上がるようにアーカイヴの画像で当該箇所を示しておく。

To the war southward
In which he, at that time, received an excellent hiding.
And the Greek emperor was in Florence
(Ferrara having the pest)
And with him Gemisthus Plethon
Talking of the war about the temple at Delphos,
And of POSEIDON, concret Allgemeine,
And telling of how Plato went to Dionysius of Syracuse
Because he had observed that tyrants
Were most efficient in all that they set their hands to,
But he was unable to persuade Dionysius
To any amelioration.

『荒地』以上に断片の積み重ねからできている *Cantos* の一部に解説を加えてもほとんど意味

がないので、内容については触れないことにする。さて、中央あたりの“POSEIDON”である。もちろん、ギリシア神話の「海神」である。綴りはすべて英字大文字になっているが、目を凝らすと、“P”は例えば次行の“Plato”の“P”、“Dionysius”の“D”と同じフォントサイズだが、“OSEIDON”では大文字のまま少しだけサイズを落としてある。植字による「異化効果」であると思われる。

ところで、パウンドは初期の *Cantos* からギリシア文字をそのまま使用している。次の画像は Canto 7 が *The Dial* (Vol. LXXI, no. 2, August 1921) に掲載された時のものである。(なお、Canto 7 はほぼ同時期に Boni & Liveright 社から出版された *Poems 1918-1921* にもおなじ形で掲載されている。このあたりの出版習慣は『荒地』に通じるものがある。)

THE SEVENTH CANTO

Eleanor (she spoiled in a British climate)
 'Ελανδρος and 'Ελέπτολις, and poor old Homer blind,
 blind as a bat,
 Ear, ear for the sea-surge; rattle of old men's voices.

ここも内容には触れないこととするが、このような植字を見ると、本当は *The Criterion* 版でも“POSEIDON”はギリシア文字での表記を意図していたのではと推測される。ギリシア文字と英文字を同時に打てるタイプライターはないので、パウンドはどのような形で印刷所（出版社）に原稿を渡していたかということ、次のアーカイヴが参考になる (Beinecke Rare Book and Manuscript Library)。画像は Canto 14 のタイプ原稿である。

dung , last cess pool of the universe ,
 mysterium , acid of sulphur ,
 the pussilanimous , raging
 plunging jewels in mud , and howling to find them
 unstained
 saddic mothers driving their daughters to bed with decrepitude
 with men smelling like dogs ,
 sows eating their litters
 the
 and here / placard EIKON GEA , and here
 THE PERSONEL CHANGES
 melting like dirty old wax
 decayed candles , the bums sinking lower
 faces submerged under hams

下から5行目に“EIKON GEA”とタイプ打ちされている。「大地の似姿」という意味のギリシア語だが、これが *A Draft of XVI Cantos* として実際に出版されたのは1925年のことで、そこではこうなっている（前後数行のみを示す）。

sadic mothers driving their daughters to bed with decrepitude,
sows eating their litters,
and here the placard ΕΙΚΩΝ ΓΗΣ,
and here: THE PERSONNEL CHANGES...

多分、印刷所には別途何らかの指示があり、ギリシア文字で植字されたのだと思われる。つまり先ほどの“POSEIDON”もそのような意図だったのに *The Criterion* の印刷を請け負った Hazell, Watson & Viney 社ではギリシア文字の活字が用意できなかったのも、妥協的に先述のような植字で代替させたのではないだろうか。

ギリシア文字についてはパウンドも苦勞したようで、こんな例もある。Canto 23の初出は *The Exile* (3, Spring 1928) だが、冒頭に“The opening of this poem is too obscure to be printed apart from the main context of the poem”と記載され最初の33行が割愛されている。現行の *Cantos* を確認すると33行のうち6行がギリシア文字での表記になっている。*The Exile* はパウンド自身が編集に携わったリトル・マガジンなので“too obscure”とはおかしい話なのだが、要するにこの時点でも小さな印刷所ではギリシア文字が用意できなかったのであろう。

ただし Hazell, Watson & Viney 社ではその後はギリシア文字を鑄造できたようで、*The Criterion* の1924年春号ではギリシア文字が使われているし、エリオットの *Poems 1909–1925* はここで印刷され（出版社は Faber & Faber）、例えば“Sweeney among the Nightingales”にはアエスキュロスの『アガメムノン』の一節がギリシア文字でエピグラフとして載せられている。なお、『荒地』に「より優れた匠 エズラ・パウンドに (“For Ezra Pound *il miglior fabbro*”)」という献辞が付けられたのはこの版以降のことで、これで「エピグラフ」「献辞」「自注」というパラテキスト群が揃い踏みすることとなり、今に到ることになる。

以上、最初期の『荒地』で *The Criterion* にのみエピグラフが存在しない理由についての仮説を、傍証などにより述べてみた。

ただ、とても不思議なことがある。先述したように、エリオットは *The Criterion* を船出させるにあたりきわめて慎重に準備を進めていて、宣伝周知のこと、金銭的なことなど細かいことを含めてコブデン＝サンダーソンと頻繁にやり取りをしている。1921年10月に「季刊文芸誌を始めたい」との最初の手紙を送ってから、1922年だけでも32通を送っているが、「不思議」

というのは、そのやり取りの中で *The Criterion* 創刊号には『サテュリコン』からのエピグラフが欠けていることがまったく触れられていないことである。コブデン=サンダーソンからエリオットに宛てた手紙は公開されていないが、どこかの時点で委託した印刷所ではギリシア文字を用意できないと伝えた可能性はないではないが、エリオットはまったく反応していない。10月初旬には自身で最終校正もしているのに、*The Criterion* の『荒地』がどのような形をしているかは当然確認できていたはずである。

ここで「複数の『荒地』」の中で *The Criterion* 版にはエピグラフが付けられていない理由として、印刷所がギリシア文字の活字を用意できなかったのではというある意味「外在的」な理由ではなく、もっと「内在的」な理由を提示してみたい。

これまで幾度となく語られてきた、エピグラフの差し替えをめぐるエリオットとパウンドとのやり取りを、多少の「意識」を含めて振り返ってみる。

[1922年1月26日(?)のパウンドへの手紙 (*Letters I 629*)]

『闇の奥』からの引用はやめた方がいいということでしょうか。それとも「コンラッド」という作家名を載せない方がいいということでしょうか。コンラッドのエピグラフはとても理解の助けになると思いますが。

[同年1月28日(?)のパウンドからの手紙 (*Letters I 630*)]

コンラッドの件についてはお好きにどうぞ。私には、流行作家についてどうこういう資格などないです。

どうだろう、エリオットの「こだわり」と、パウンドの「投げやり」なやり取りが分かると思う。このやり取りは『荒地』生成の過程を語る時に何度も紹介されているので解説は不要だろう。

ただ、その後のやり取りである。ここは原文で示す。

[同年3月12日のパウンドへの手紙 (*Letters I 641*)]

Cher maître:

I have substituted for the J. Conrad for the following, or something like it:

“Nam Sibyllam quidam[sic] Cumis ego ipse meis oculis[sic] vidi in ampulla pendere, et ubi[sic] pueri dicerent, [sic] Σίβυλλα τί θέλεις; respondebat illa, ἀποθανεῖν θέλω.”

何度も読んだ手紙なのだが、今回あらためて細かい部分に目を向けて気になったことがある。「the following, or something like it」の“or something like it”である。あえて日本語にすれば、「ま、こんなところではどうでしょうか」だろうか。先のパウンドの返事も投げやりだったが、こちらのエリオットの方ももっと投げやりである。[sic]が4か所あり、Loeb Classical Libraryに従えばかなり正確性を欠いていて（現在は訂正されている）、あえて言えば、コンラッドのような「思い入れ」が感じられないのである。つまり、今でこそ「私は死にたい」というエピグラフがあり「四月はいちばん残酷な月」と続き、どの解説書・研究書でもいわば不即不離の関係にあるように読まれているが、どうもエリオットは現在私たちが読解しているほどは『サテュリコン』にこだわってはいなかったのではないだろうか。

もう一つ指摘しておきたいことがある。どういうわけか、『荒地』のエピグラフとしての『サテュリコン』について語る時に、ほとんど触れられてこなかった事実がある。それは、エリオットにとって『サテュリコン』は「使い回し」の古典だったということである。『聖なる森』*The Sacred Wood*は『荒地』の二年前に出版されたエリオットの第一文芸評論集で、「完全なる批評家」「伝統と個人の才能」他十数編の評論が収められている。実は、評論集全体には冒頭に「エピグラフ」が付けられていて、それが『サテュリコン』の一節だった。「トリマルキオの饗宴」の次に置かれた「エウモルポス」の章の第83節である。『サテュリコン』全体の語り手エンコルピウスたちが、延々と続くトリマルキオの饗宴から逃げ出すと、とある画廊で一行は怪しげな老詩人エウモルポスに出会う。エピグラフ全体は少し長いので、老詩人が語った部分だけを示す（国原訳）。

わしは詩人である。しかも心からそうありたいと願っているような、異彩を放つ才能の持ち主である。ただし、月桂冠というものにいくばくかの信がおけるものとしての話である。というのも、この月桂冠といえども、今日では依怙臆員により資格のない奴にまで恵与されているのが実情である。

『聖なる森』が上梓されたのはエリオットが32歳の時だった。そういう新進の文芸批評家が自らの第一評論集の冒頭に上記のような一節を掲げるとするのは、ラテン語という「薄い皮膜」はあったとしても、自己韜晦にもほどがあるとも言えようか。

繰り返しになるが、今は「私は死にたい」という断片だけが取りざたされるが、エリオットにとって『サテュリコン』はこのような文脈の中にあつたということは確認しておきたい。

旧稿をなぞることになるが（「エピグラフという境界」）、エリオットは思いのほか詩の作品数が少なく、断片的で未完成なものや気軽な成立事情で書かれた小品は別として、数え上げて

みれば実は36篇程度にすぎない。短詩やフランス語で書かれたものを除くとせいぜい27篇となるが、特徴的なのはそのうち15篇にはエピグラフが付けられているという事実である。『荒地』第五部の「私の経験は私自身の円環、つまり外に対して閉ざされた円環の中にとどまる」というよく知られた自注にあるブラッドレー (F. H. Bradley) の言葉を思い起こすなら、エピグラフはそういう円環に小さな穴を開けようとする試みなのかもしれない。ただ、それがとても小さな穴であるだけに、私たちには相応の読みの慎重さが要求されるはずである。

「ただ一つの『荒地』」への道

「複数の『荒地』」に戻る。

The Criterion にはエピグラフも自注もない、*The Dial* には自注のほか「第一部」などの数字がなく、Hogarth Press 版には行数が振られていなかった。『荒地』の「原風景」は少しずつ表情が異なっていたのである。比喩的な言い方になるが、長い間に区画整理された『荒地』ではなく、まだ境界線もはっきりせず歩けば足を取られるような『荒地』にもう一度立ち返りたいと思う。

もちろん、今私たちの目の前にあるのは「ただ一つの『荒地』」であろう。巫女シビルの消え入るようなつぶやきで始まり、先輩詩人への言祝ぎが飾られ、序数の付けられた階梯的な物語展開が予想され、最高度のパラテキストとも言うべき自注が道案内をしている『荒地』である。これはこれで向かい合うしかない。しかし、本稿で考察したようないくつかの「原風景」が確かに存在したことを確認するならば、その「ただ一つの『荒地』」もまた異なる表情を見せ始めるのではないだろうか。

注

本稿は口頭発表「取り囲まれる『荒地』」(日本 T. S. エリオット協会第35回大会、青山学院大学、2023年11月18日)の前半部分を加筆修正したものである。発表後半は *The Criterion* と *The Dial* の当該号で『荒地』に並んで掲載されている諸文という「もう一つのパラテキスト群」という視点から『荒地』を照射してみたいという試みだったが別稿としたい。

本稿執筆にあたって参照したアーカイブは次の通り。

The Criterion Vol. 1 No. 1, October 1922: <https://tseliot.com/the-criterion/vol-1> [1967 reprint]

The Dial Vol. 73 No. 3, November 1922: https://archive.org/details/sim_dial_1922-11_73

Boni & Liveright: <https://archive.org/details/wasteland01elio/>

Hogarth Press: <https://www.brandeis.edu/library/archives/essays/special-collections/ts-eliot.html> 他

引用・参考文献

- Brooker, Jewel Spears and Bentley, Joseph. *Reading The Waste Land: Modernism and the Limits of Interpretation*. U of Massachusetts P, 1990.
- Eliot, T. S. *Collected Poems 1909–1962*. Faber and Faber, (reset) 2002.
- . *The Letters of T. S. Eliot Volume I*. Edited by Valerie Eliot and Hugh Haughton, Revised Edition, Faber and Faber, 2009.
- . *The Poems of T. S. Eliot, Volume I, Volume II*. Edited by Christopher Ricks and Jim McCue, Faber and Faber, 2015.
- . *The Sacred Wood*. Faber and Faber, (reset) 1997.
- . *The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts Including the Annotations of Ezra Pound*. Edited by Valerie Eliot, Faber and Faber, 1971.
- Gallup, Donald. *A Bibliography of T. S. Eliot*. Faber and Faber, 1969.
- Heseltine, Michael and Rouse, W. H. D. (translators), *Petronius Seneca*. Loeb Classical Library, Harvard UP, Willima Heinemann, 1969.
- Murphy, Russell Elliott. *Critical Companion to T. S. Eliot*. Facts on File, 2007.
- Pound, Ezra. *The Cantos of Ezra Pound*. New Directions, 1991.
- Rainey, Lawrence. *The Annotated Waste Land with Eliot's Contemporary Prose*. Second Edition, Yale UP, 2006.
- . *Revisiting The Waste Land*. Yale UP, 2005.
- 大石和哉・滝川睦・中田晶子編『境界線上の文学』彩流社、2013.
- 組版工学研究会『欧文書体百科事典』朗文堂、2013.
- 佐藤亨・平野順雄・松本真治編『四月はいちばん残酷な月』水声社、2022.
- コンラッド『シークレット・エージェント』高橋和久訳、光文社古典新訳文庫、2019.
- ジョウゼフ・コンラッド『放浪者 あるいは海賊ベロル』山本薫訳、幻戯書房、2022.
- S. H. スタインバーグ『西洋印刷文化史』高野彰訳、日本図書館協会、1985.
- スタン・ナイト『西洋活字の歴史』安形麻理訳、慶應義塾大学出版会、2014.
- ペトロニウス『サテュリコン』国原吉之助訳、岩波文庫、1991.

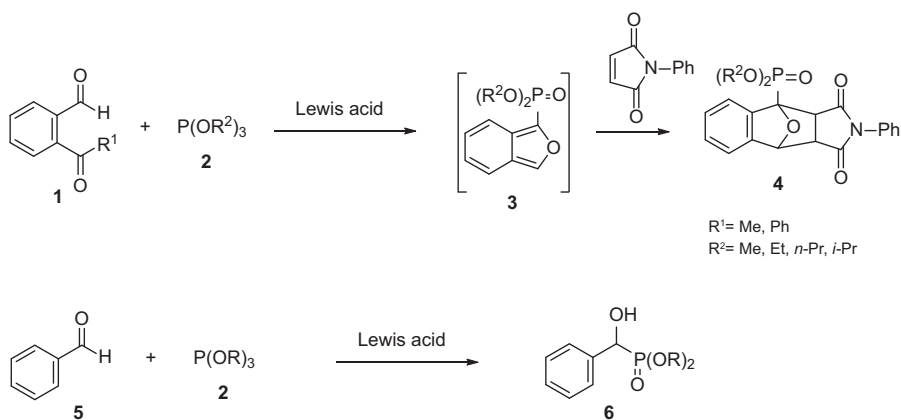
ルイス酸存在下でのトリアルキルホスファイトの 1-フェニル-1*H*-ピロール-2,5-ジオンへの 1,4-付加反応による 2 量化反応

山 名 賢 治・中 野 博 文

はじめに

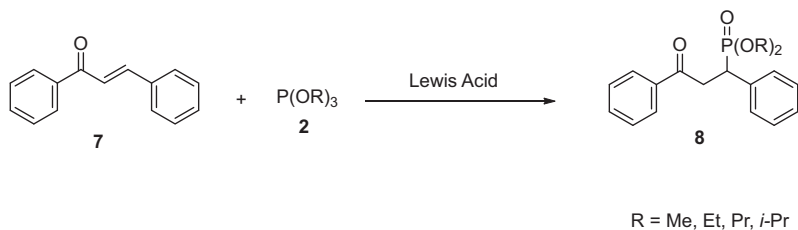
ホスホン酸誘導体は、生理活性を示す機能性分子の構築において重要であり、カルボニル化合物と 3 価または 5 価の有機リン化合物の反応によるリン酸エステルの生成については、多くの研究がなされてきた¹⁾⁻⁵⁾。我々は、トリアルキルホスファイトと *o*-フタルアルデヒドとその誘導体によるイソベンゾフラン誘導体の合成し、反応機構と反応の律速段階を検討した^{6),7)}。また、その応用として、ベンズアルデヒド誘導体による α -ヒドロキシホスホナート誘導体を合成し、反応機構と反応の律速段階を検討した⁸⁾。

キーワード：Lewis acid, trialkyl phosphite, dimerization reaction, 1-phenyl-1*H*-pyrrole-2,5-dione



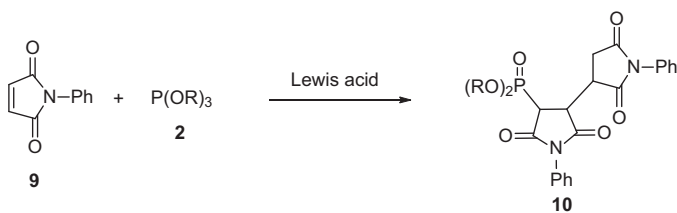
Scheme 1

上記の反応は、ルイス酸によってホルミル基を活性化させることによって、トリアルキルホスファイトとの1,2-付加反応が起るが、そのさらなる応用として、 α,β -不飽和カルボニル化合物への1,4-付加の試みとして、(*E*)-1,3-ジフェニルプロパ-2-エン-1-オン（カルコン）との反応について、反応機構と反応の律速段階を検討し、置換基が反応に及ぼす影響を報告した^{9), 10)}。



Scheme 2

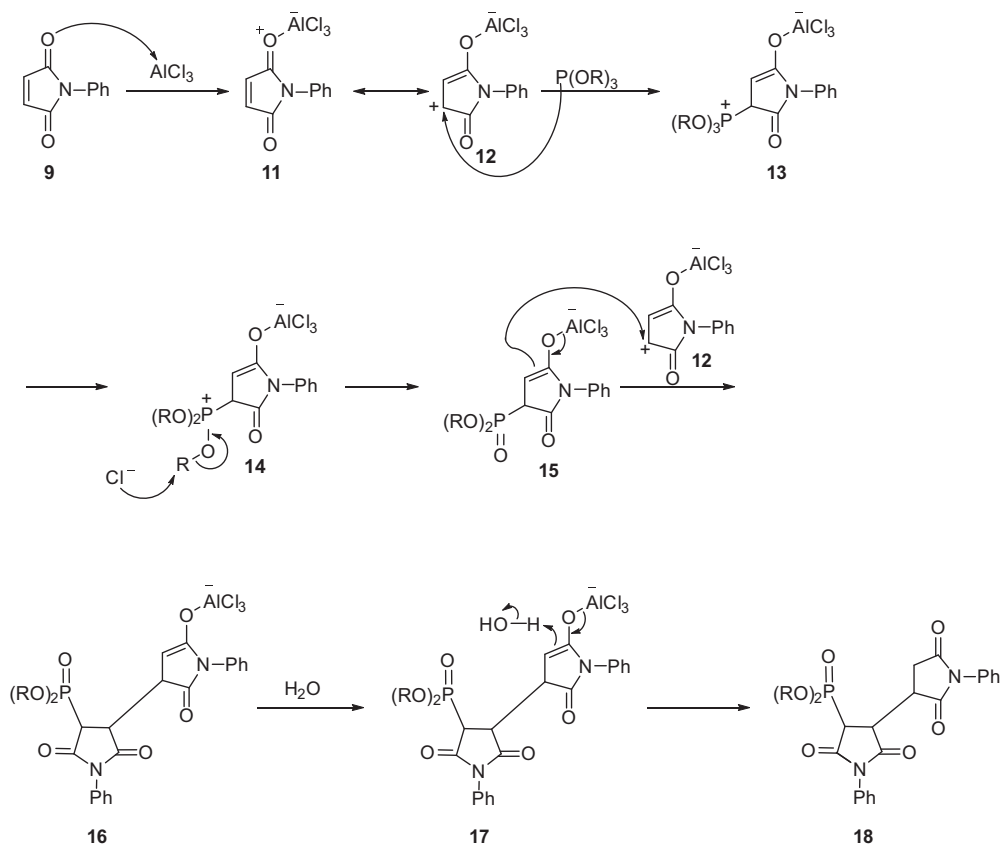
今回は、トリアルキルホスファイト (2) と1-フェニル-1*H*-ピロール-2,5-ジオンとの反応において、カルコンと同様に1,4-付加反応が起こるだけでなく、2量化が起こったため、反応的考察を行った。



Scheme 3

1. 反応機構

塩化アルミニウムが1-フェニル-1*H*-ピロール-2,5-ジオンのカルボニル酸素に配位し、トリアルキルホスファイトがマイケル付加を起こして**13**を生成し、リン酸エステル基のアルキル基が脱離し**15**が生成する。**15**が**12**に付加し、**16**が生成し、**18**が得られる。

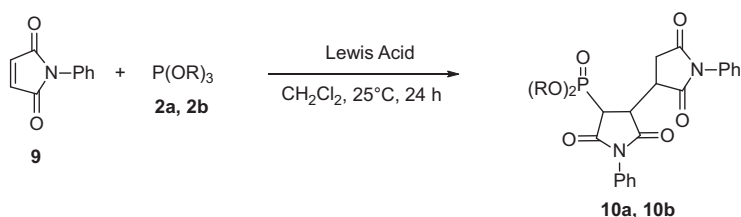


Scheme 4

2. 反応条件の検討

ホスファイトアルキル基と種々のルイス酸による反応条件の検討を行った結果、ホスファイトのアルキル基がエチル基で、ルイス酸に塩化アルミニウムを用いたとき、収率が42%であり、最も高収率で付加物が得られた (Table 1, Entry 6)。ただし、ホスファイトのアルキル基が

メチル基では、同様の反応条件では収率が6.5%であった (Table 1, Entry 3)。また、ホスファイトのアルキル基がメチル基のときは、エチル基に比べると、全体的に収率が低いことが確認された (Table 1, entry 1-6)。*o*-フタルアルデヒドとその誘導体によるイソベンゾフラン誘導体の合成反応^{6),7)}やベンズアルデヒド誘導体との1,2-付加反応⁸⁾、(*E*)-1,3-ジフェニルプロパ-2-エン-1-オン (カルコン) との反応^{9),10)}においては、ホスファイトのアルキル基がメチル基とエチル基の間では、これほど顕著な収率の違いは見られず、2 量化反応においては、ホスファイトのアルキル基が収率に及ぼす影響が大きいことが確認された。これは 2 量化反応においては、**15**が**12**を攻撃する際に立体的に混み合っているため、ホスファイトのアルキル基による反応の進行に及ぼす影響が大きいと考えられる。

Table 1. Lewis acid-catalyzed reaction of 1-phenyl-1*H*-pyrrole-2,5-dione with trialkyl phosphite.

Entry	R	Lewis Acid	Yields 10a, 10b (%) ^{a,b}
1	Me	MgBr ₂	—
2	Me	ZnBr ₂	2.5
3	Me	AlCl ₃	6.5
4	Et	MgBr ₂	26
5	Et	ZnBr ₂	2.4
6	Et	AlCl ₃	42

a Yield of adducts. b Isolated yield.

まとめ

1-フェニル-1*H*-ピロール-2,5-ジオンへの1,4-付加反応による 2 量化反応においては、過去に報告した、*o*-フタルアルデヒドとその誘導体によるイソベンゾフラン誘導体の合成反応^{6),7)}やベンズアルデヒド誘導体との1,2-付加反応⁸⁾、(*E*)-1,3-ジフェニルプロパ-2-エン-1-オン (カルコ

ン)との反応とは、ホスファイトのアルキル基が反応の進行に及ぼす影響が異なることがわかった。さらに、*o*-フタルアルデヒドとその誘導体によるイソベンゾフラン誘導体の合成反応^{6),7)}やベンズアルデヒド誘導体との1,2-付加反応⁸⁾においては、KIを加えると反応が促進され、収率が向上することが確認されたが、本反応においては同様の効果は得られなかった。以上のことから、反応の律速段階が過去に報告した一連の反応とは異なると考えられ、さらなる反応機構の検討が必要である。

Experimental Section

Melting points were obtained with a Yanaco micro melting point apparatus and are uncorrected. ¹H and ¹³C NMR spectra were recorded on a JEOL EX-270 in CDCl₃, with TMS as an internal standard.

General Synthesis of dimerization adduct.

Lewis acid was added to a solution of 1-phenyl-1*H*-pyrrole-2,5-dione (1 mmol) in dry CH₂Cl₂ (3 mL) at 0 °C, after the mixture was stirred at this temperature for 0.5 h, trialkyl phosphite (1 mmol) was added and the mixture was stirred at reflux. The reaction mixture was quenched by the addition of aq HCl, and the mixture was extracted with CH₂Cl₂. The organic layer was washed with aq NaHCO₃, dried over Na₂SO₄, and concentrated *in vacuo*. The residue was chromatographed on silica gel (AcOEt : hexane = 1 : 1) to give the phosphonate.

10a.

¹H NMR (CDCl₃, 270 MHz) δ = 3.24 (1 H, dd, J = 18.0, 9.9 Hz, CH), 3.40 (1 H, dd, J = 18.0, 6.0 Hz, CH), 3.56 (1 H, ddd, J = 9.8, 6.1, 2.7 Hz, CH), 3.68 (1 H, ddd, $^2J_{P-H}$ = 18.7 Hz, J = 6.9, 2.7 Hz, CH), 3.92 (3 H, t, $^3J_{P-H}$ = 11.2 Hz, CH₃), 3.98 (3 H, t, $^3J_{P-H}$ = 11.0 Hz, CH₃), 4.08 (1 H, dd, $^2J_{P-H}$ = 22.9 Hz, J = 6.8 Hz, P-CH), 4.23-4.41 (4 H, m, CH₂), 7.22-7.25 (4 H, m, arom. H), 7.39-7.50 (6 H, m, arom. H).

10b.

¹H NMR (CDCl₃, 270 MHz) δ = 1.39 (3 H, t, J = 6.9 Hz, CH₃), 1.39 (3 H, t, J = 7.1 Hz, CH₃), 3.21 (1 H, dd, J = 18.0, 9.7 Hz, CH), 3.39 (1 H, dd, J = 18.0, 6.1 Hz, CH), 3.56 (1 H, ddd, J = 9.5, 5.9, 2.6 Hz, CH), 3.65 (1 H, ddd, $^2J_{P-H}$ = 18.5 Hz, J = 6.6, 2.6 Hz, CH), 4.01 (1 H, dd, $^2J_{P-H}$ = 22.6 Hz, J = 6.4 Hz, P-CH), 4.23-4.41 (4 H, m, CH₂), 7.20-7.26 (4 H, m, arom. H), 7.37-7.49 (6 H, m, arom. H).

文献

- 1) Zhang, F.; Jiang, M.; Liu, J.-T. *Tetrahedron Lett.* **2017**, 58, 1871.
- 2) Strappaveccia, G.; Bianchi, L.; Ziarelli, S.; Santoro, S.; Lanari, D.; Pizzoa, F.; Vaccaro, L. *Org. Biomol. Chem.* **2016**, 14, 3521.
- 3) Li, G.; Wang, L.; Yao, Z.; Xu, F. *Tetrahedron Asymmetry* **2014**, 25, 989.
- 4) Kotani, S.; Sugiura, M.; Nakajima, M. *Tetrahedron* **2008**, 64, 6415.
- 5) Zhao, D.; Yuan, Y.; Chan, A. S. C.; Wang, R. *Chem. Eur. J.* **2009**, 12, 2738.
- 6) Yamana, K.; Nakano, H. *Tetrahedron Lett.* **1996**, 37, 5963.
- 7) Yamana, K.; Ibata, T.; Nakano, H. *Synthesis* **2006**, 24, 4124.
- 8) 『愛知学院大学教養部紀要』第64巻第2号, **2016**, 35-42.
- 9) 『愛知学院大学教養部紀要』第64巻第3号, **2016**, 57-64.
- 10) 『愛知学院大学教養部紀要』第65巻第1号, **2017**, 89-95.

Systemic Functional Linguistics as a Useful Tool for Analyzing Text (Part 4)

Masamichi WASHITAKE

Abstract

This present paper is the continued discussion of Systemic Functional Linguistics as useful tool for analyzing text¹. This paper deals with context of situation, register and genre. It also discusses differences between Halliday's & Hasan's model of context and Martin's model of context. In addition, it briefly sketches grammatical metaphor and other aspects of language. This paper concludes that SFL is a useful tool for exploring language and social context because it considers language to be a system network (meaning potential); it understands language as multi-strata and multifunctional model; and it allows researchers to analyze language and its context in one framework.

Keywords: Systemic Functional Linguistics (SFL), context of situation, register, field, tenor, mode, genre, grammatical metaphor

8. Context: Introduction

Language is not used in a 'vacuum' between ideal speakers and listeners. We use language in a certain situation: When we use language, a certain social interaction takes place; the language is addressed directly or indirectly to someone with particular social roles; it may be spoken, written or both. Systemic Functional Linguistics (hereafter SFL) refers to these situations of language use as **context of situation** (Halliday and Hasan, 1985).

Halliday (1977, 2002b: 55) suggests that context of situation consists of the followings:

- (1) the social action: that which is "going on", and has recognizable meaning in the social system; typically a complex of acts in some ordered configuration, and in which the text is playing some part; and including "subject-matter" as one special aspect,

- (2) the role structure: the cluster of socially meaningful participant relationships; both permanent attributes of the participants and role relationships that are specific to the situation; including the speech roles, those that come into being through the exchange of verbal meanings,
- (3) the symbolic organization: the particular status that is assigned to the text within the situation; its function in relation to the social action and the role structure; including the channel or medium, and the rhetorical mode.

In his suggestion, (1) the social action is referred to as **field**, (2) the role structure as **tenor** and (3) the symbolic organization as **mode**.

Typically, each aspect of context of situation is realized by a corresponding area of language: Field is realized by experiential metafunction; tenor is realized by interpersonal metafunction; and mode is realized by textual metafunction.

There is an ‘outer’ context, called **context of culture**. Context of culture is ‘the sum of all the meanings it is possible to mean in that particular culture’ [sic] (Butt, 2012: 22). Figure 8-1 shows the stratification model of language and context.

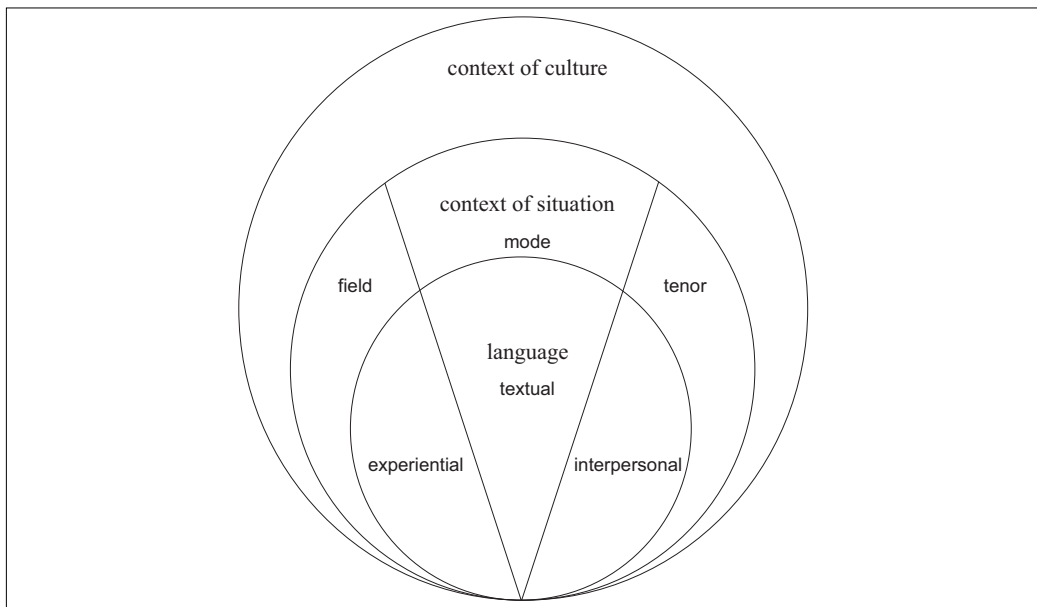


Figure 8-1: Stratification model of language and context

When texts share (to some extent) the same configuration of field, tenor and mode and thus share the

same types of experiential, interpersonal and textual meanings, the texts are said to be in the same **register** (e.g., Halliday, 1974, 2007; Halliday, 1975b, 2007; Halliday, 1977b, 2002; Halliday, 1978). In addition, when the texts share the same schematic structure or **generic structure** (i.e., beginning, middle and end), the texts are said to be in the same **genre** (e.g., Halliday, 1985; Hasan, 1984, 1996).

By expanding and modifying this model of context, Martin (1992) proposes the term **ideology** to refer to an ‘outer’ context and **register** to refer to ‘inner’ context. In addition, Martin’s model locates **genre** between ideology and register. For Martin, register and genre do not only refer to text types: Register and genre constitute his stratification model of language and context (Figure 8-2).

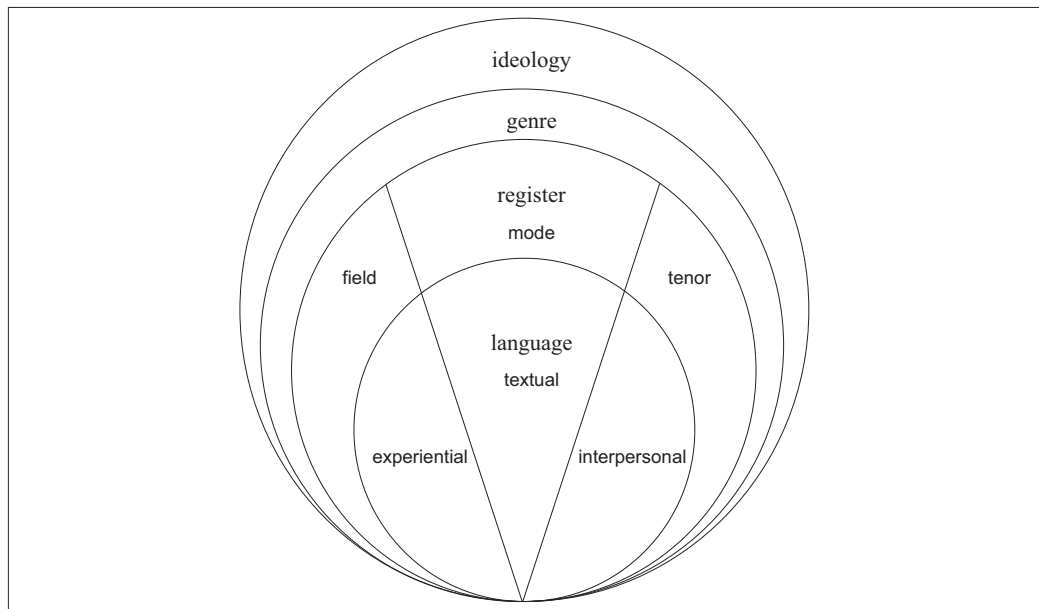


Figure 8-2: Martin’s model of language

The following sections will explore context of situation (8.1), register and genre (8.2) and Martin’s model of context (8.3).

8.1 Context of Situation

Context of situation consists of field, tenor and mode. This section will explore field (8.1.1), tenor (8.1.2) and mode (8.1.3).

8.1.1 Field

Field concerns what kind of social interaction is taking place, which include people, things, processes, qualities and places. Martin (1992: 542–546) provides provisional classification of fields according to lexis (technical or not) and institution (socially trained or not). The first distinction is whether the field depends on oral transmission or writing transmission. Within orally-transmitted fields, fields are divided into domestic ones where limited vocabularies are used and specialized ones where more elaborated

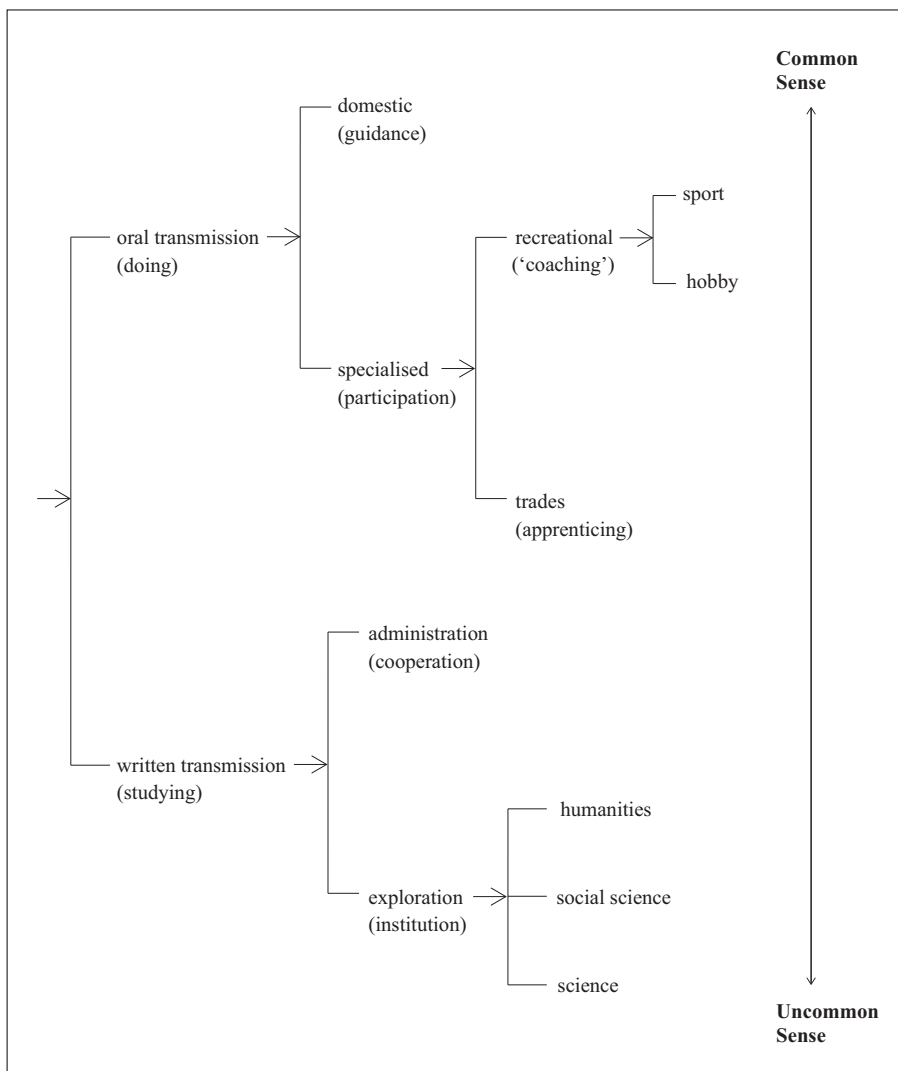


Figure 8-3: Martin's provisional classification of fields (adopted from Martin, 1992: 544)

vocabularies are used. Specialized fields are further divided according to the degree of elaboration of vocabularies. The fields depending on writing transmission requires education in institutions and further divided according to the degree of specialty. Figure 8-3 shows Martin's provisional classification of fields.

Field is typically realized by experiential meaning of language. Martin and Rose (2008: 14) analyze text types and field as follows:

From the perspective of field, the discourse patterns of texts vary in the degree to which they are organised as activity sequences, and whether they are about specific people and things, or about general classes of phenomena and their features.

For example, when you lift your desk with your friend, you tend to talk a less structured way and talk about a specific thing. On the other hand, when you write a report on plant cells, your report should be organized and you write about plant cells in general. Since writing a report on plant cells is technical, it requires institutional learning including elaborated lexis and metaphorical expressions.

8.1.2 Tenor

Tenor concerns the relationship between speakers/ writers and listeners/ readers. Tenor is typically realized by interpersonal meaning of language.

Poynton (1989) suggests three dimensions of tenor: **power**, **contact** and **affect**. As Poynton (1989: 76) notes, 'systems here on the whole are to be taken as representing clines, or continua, rather than discrete choices.' Thus, 'power ranges from equal to unequal, rather than discrete choices.' If power is unequal, it is dominance or deference, with a matter of degree. Power derives from one or more sources: force (physical strength), authority (relationships between superior and inferior social roles), status (socially desirable stuff but that are not provided equally) or expertise (degree of experience, knowledge and skill of a field). The realization principle of power is **reciprocity**. If interactants are more equal, they both tend to start new topics and interrupt with each other; but if they are less equal, only superiors can start new topics and interrupt inferiors.

Contact needs to be considered from four aspects: **frequency** (whether the contact is seldom or daily), **extent** (whether the contact of time is brief or extended), **role diversification** (whether people relate to each other as one social role or in many different situations) and **orientation** (whether the interaction is oriented to persons or tasks). The realization principle of contact is **proliferation**. If the extent of contact is greater, interactants can choose wider variety of contents to be exchanged.

When Affect is **unmarked** (i.e., typical/ natural), it is absent from the interaction; if Affect is **marked** (i.e., atypical/ unnatural) it is **positive** or **negative** and **permanent** or **transient**. Affect is realized by **amplification** of language. Amplification is achieved by repeating the same item or structure and increasing the degree of the feeling.

Imagine, for example, that you talk with your friend: Typically, the relationship is equal; the degree of contact is frequent; the extent in time is extended; the social role is multiplex; the interaction is person-oriented; and you both tend to have positive and permanent affect to each other. On the other hand, imagine that you talk with your supervisor: The relationship is unequal in that the supervisor is an expert and in authority; the degree of contact is less frequent; the extent of time is not extended; the only social role is likely that of supervisor-student; the interaction is task-oriented; and it is less likely that there is special feeling between you and her/ him.

8.1.3 Mode

Mode concerns whether the text is interactive or monologue, whether the language is constituency or ancillary and the channel of communication. Mode is typically realized by textual meaning of language.

For example, when you lift your desk with your friend, your communication is more interactive, you use language to assist the task and the language is spoken. On the other hand, when you write a report on plant cells, the writing is typically monologue, your language is constitutive of the field and the language is written.

It should be noted here that whether the language is spoken/ written and the text is spoken/ written language are different. Whether the language is spoken/ written is a matter of mode; while whether the text is spoken/ written is related to field and tenor. For example, we can speak like a scientific paper and we can write casual conversation.

8.2 Register and Genre

Register and **genre** are patterns of language use in a certain context. Register focuses on the meanings in common; while genre focuses on the obligatory structure elements that are common to a certain language use.

8.2.1 Register

Register is language variation in a particular context. Butt et al. (2012: 27) explains register as follows:

When texts share the same context of situation to a greater or lesser extent, they will share similar experiential, interpersonal and textual meanings and so they belong to the same register.

Following this explanation, register is variations of language use under a certain context. For example, we can say that a report on plant cells and one on local government belong to the same register if their focuses are on how things are organized and they are submitted as term papers.

It should be noted that the term, **text type** and register refer to the same phenomenon seen from the different viewpoints: Seen from instance of language, text type is a collection of similar texts; on the other hand, seen from the system of language, register is a subsystem that realizes a particular combination of field, tenor and mode (Halliday, 1997a, 2003: 260).

It should also be noted that register is different from **dialect** and **code**. Dialect depends on the language user; while register depends on the context (Halliday, 1975a, 2007). Code reflects the social class; while register reflects the situation (Halliday, 1975b, 2007).

8.2.2 Genre

Genre is the schematic structure determined by purposes. In exploring nursery tales as a genre, Hasan (1984, 1996) summarizes the **Generic Structure Potential** (SP or GSP). Hasan (1996: 53) explains the GSP as follows:

The GSP is an abstract category; it is descriptive of the total range of textual structures available within a genre *G*. It is designed to highlight the variant and invariant properties of textual structures within the limit of one genre; and to achieve this, the GSP must be capable of specifying the following facts about text structure:

- I it must specify all those elements of structure whose presence is obligatory, if the text is to be regarded as a complete instance of a given genre by the members of some sub-community;
- II in addition, it must enumerate all those elements whose presence is optional, so that the fact of their presence or absence, while affecting the actual structural shape of a particular text, does not affect that text's generic status;
- III the GSP must also specify the obligatory and optional ordering of the elements *vis-à-vis* each other, including the possibility of iteration.

After her remark on GSP, Hasan (1996: 54) suggests the SP of the nursery tale presented below.

[(\langle Placement \rangle ^) Initiating Event ^]  Sequent Event ^ Final Event [\wedge (Finale)·(Moral)]

According to her explanation, the elements enclosed in the round brackets are optional; the ones that are not enclosed in the round brackets are obligatory; the ones enclosed in the angled brackets may be included or interspersed with other element(s); the middle dot (originally, the raised dot) between elements means that the order of the elements on the two sides of the dots are reversible; and the carat indicates that the elements on the both sides of the carat tend to be fixed; the elements are movable in the areas enclosed in the square brackets; and the rounded arrow indicates that the element may iterate.

Another genre that is familiar to SFL researchers is recipe. Thompson (2014: 43) shows a recipe for roast potatoes to illustrate its genre:

In any instance of a genre, there are some stages that are more or less certain to appear: a recipe without title, ingredients and instructions stages would no longer be a recognizable recipe. Other stages are highly likely to appear in most recipes, such as what I have called a ‘hook’ whose main purpose is to ‘sell’ the recipe to the reader. Others are optional: for example, some recipes may not include practical details of timing or helpful tips, and most recipes do not give nutrition details.

Based on his statement, a possible GSP of the recipe can be shown as follows:

Title ^ (Hook) ^ Ingredients ^ Instructions \langle Practical details of timing \rangle ^ [(Nutrition details) · (Helpful tips)]

In addition to the generic analysis, he suggests the features of the register of recipes: the ingredients are listed using nominal groups; and in the instruction stage, imperative clauses without ‘please’ are used and the clauses are the material type.

The relationship between genre and register is interactive and dynamic: Interactive in that genre provides circumstance to register to work and register determines the nature of genre; and dynamic in that while the repeated use of a regular register in a certain genre keeps society as it is, unfamiliar deployment of register in a certain genre can cause social change.

8.3 Martin's model of context

By extending Halliday's and Hasan's discussion on context, Martin (1992) proposes his model of context.

Halliday (e.g., 1974, 2007; 1975b, 2007; 1977b, 2002; 1978) uses the term, register to refer to language use determined by configuration of a certain context (i.e., field, tenor and mode). On the other hand, Martin (1992) uses the term to refer to 'inner' context and treats register as social context realized by language.

In addition, Martin (1992: 505) defines genre as 'a staged, goal-oriented social process realized through register' and proposes that text structure is generated at the plane of genre. By using his model, genre and register can be analyzed independently. For example, narrative genre can be about various social interactions and topics (field); it can be addressed to people who have different status and relationship (tenor); and it can be spoken, written or both (mode).

Following Martin's (1992) discussion, Martin and Rose (2008) summarize a wide range of **agnate genres** for the purpose of writing education. For example, recount, anecdote, exemplum, observation and narrative belong to the family of story genres in that they focus on events.

Rose and Martin (2012) report genre-based pedagogy designed for the secondary school students in Australia. The curriculums are known as *Write it Right* project and *Reading to Lean*, which are based on the 'mapping' of genres presented by Martin and Rose (2008) and Bernstein's discussion (e.g., 1996, 2000) on education, language and society.

For Martin (1992), the 'outer' context is ideology. He uses this term to refer to social power and its redistribution that constitute a culture. Ideology is realized by genre. The aim of his model is 'to provide a comprehensive set of discourse analysis which can be used to relate any English text to the context in which it is used' (Martin, 1992: 1).

8.4 Summary

This chapter has explored context. For Halliday and Hasan, the 'inner' context is context of situation and the 'outer' context is context of culture. Register is language variations which realizes the nature of context of situation. Genre is semantic structure which is determined by the purpose of text.

By Martin's expansion, the relationship between each stratum of context is explained by realization: Ideology, the 'outer' context is realized by genre, staged and goal-oriented structure; genre is realized by register, the configuration of field, tenor and mode; and register is realized by language. Martin's expansion of context implies that SFL is a useful 'tool'. We can improve our tools to serve our purposes. Martin's model meets requirements for conducting genre-based pedagogy.

Both models regard context as essential when we talk about language: Language cannot be separated from the culture to which speakers/ writers and listeners/ readers belong; situations where, both physically and socially the language is used; and the typical text structure and language use in a certain situation in a certain culture.

9. A Very Short Sketch on Grammatical Metaphor

Grammatical Metaphor is one of the most important terms in analyzing text from the perspective of SFL. Grammatical metaphor is ‘metaphor’ in that an expression form substitutes for another one; however, grammatical metaphor is not lexical but grammatical in that it does not substitute for one word but for one grammatical class or one grammatical structure (Halliday and Martin, 1993: 79).

For example, we can say *the economic prosperity* instead of *the economy prospers*. In this example, the grammatical structure ‘noun + verb’ is substituted by a nominal group. This grammatical ‘shift’ to noun is called **nominalization**. Nominalization is an essential factor in writing scientific, academic and bureaucratic texts. However, at the same time, it can cause some problems in understanding these texts (e.g., Halliday and Martin, 1993; Halliday, 2004). For example, in the following extract, *economic contribution to agriculture* is interpreted as *(honeybees) contributes to agriculture economically*. However, this nominal group can be interpreted as *the economy contributes to agriculture*.

honeybees are responsible for around between \$16 billion and \$20 billion worth of economic contribution to agriculture

[from ‘Clues to Collapse’ on *Scientific American*, January 2021]

Another example of grammatical metaphor is in interpersonal area. As discussed in Part 2, we can say *Could you pass me the salt, please?* instead of *Pass me the salt*. when we demand salt. In this example, *Pass me the salt*. (command) is substituted by *Could you pass me the salt, please?* (interrogative).

A third example is in the area of conjunctive and nominalization.

Contact with speakers of different languages has resulted in numerous changes to English—especially its vocabulary.

(Horobin, 2018: 17)

In this example, the logical relation of cause and effect is realized by a verbal group (*has resulted in*) instead of a conjunction (e.g., *because*). In addition, two events are nominalized and serve as participants: *Contact with speakers of different languages* as Identified/ Token; and *numerous changes to English—especially its vocabulary* as Identifier/ Value.

These substitutions are illustrated by ‘shift’ that may happen between semantics and lexicogrammar. Section 8 illustrates context on the basis of stratification. Not only context but also language is illustrated by stratification: Language is stratified into semantics, lexicogrammar and phonology/ graphology. Figure 9-1 shows stratification of context and language with corresponding metafunctions.

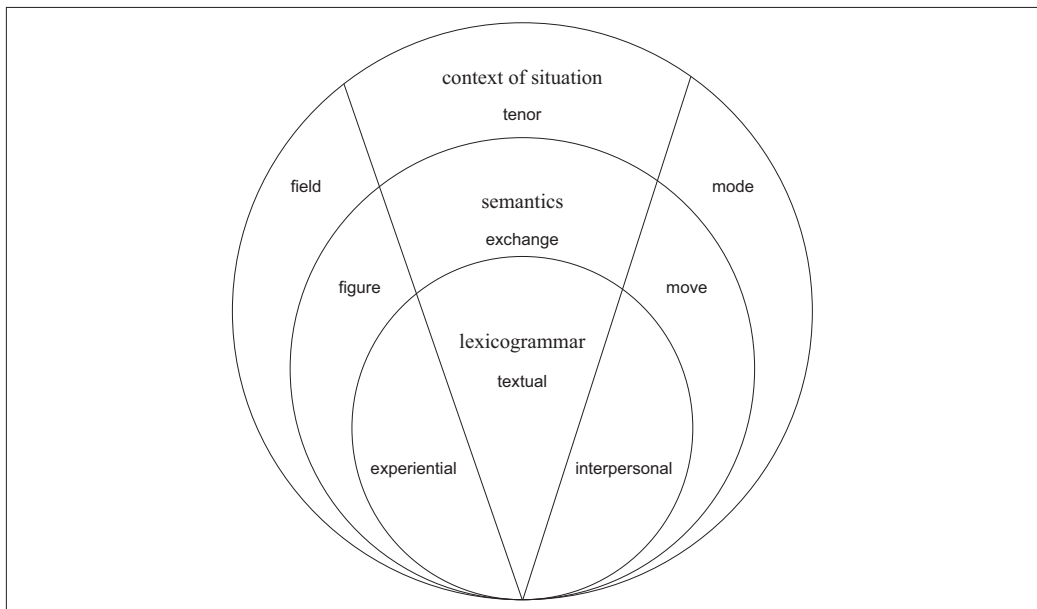


Figure 9-1: Stratification model of context and language

The relationship between each stratum is that of realization: semantics is realized by lexicogrammar and lexicogrammar is in turn realized by phonology/ graphology.

Foregrounding experiential metafunction, our experience is construed by means of the three-layered **phenomena**: **Elements** are organized into a **figure** and figures are combined into a **sequence** (Halliday and Matthiessen, 1999: 48). Phenomena are ‘congruently’ realized by three grammatical ranks: Elements are realized by groups/ phrases; figures are by clauses; and sequences are by clause complexes. The followings are examples of congruent realization.

sequence \ clause complex

As the wave travels through the medium, the particles that make up the medium undergo displacements of various kinds, depending on the nature of the wave.

(Young and Freedman, 2016: 492)

figure \ clause

the wave travels through the medium/

the particles that make up the medium undergo displacements of various kinds, depending on the nature of the wave

element \ group/ phrase

the particles that make up the medium/ undergo/ displacements of various kinds/ depending on the nature of the wave

There are four types of elements: **Participant**, **process**, **circumstance** and **relator** (Halliday and Matthiessen, 1999: 58–59). Participants, processes and circumstances are roles in figures and are congruently realized by nominal groups, verbal groups and adverbial groups/ prepositional phrases, respectively. ‘Relators serve to construe logico-semantic relations of expansion between figures in a sequence (...); they are realized by conjunction groups’ (Halliday and Matthiessen, 1999: 59).

Text	As	the wave	travels	through the medium,
semantics	relator	participant	process	circumstance
lexicogrammar	conjunctive	participant	process	circumstance
rank	conjunction group	nominal group	verbal group	prepositional phrase

Text	the particles that make up the medium	undergo	displacements of various kinds,	depending on the nature of the wave.
semantics	participant	process	figure	figure
lexicogrammar	participant	process	participant	non-finite clause
rank	nominal group	verbal g.	nominal group	non-finite clause

Figure 9-2: Congruent realization of the ‘wave’ text

Figure 9-2 shows the analysis of the ‘wave’ text: phenomena in semantics and their realizations in lexicogrammar, with corresponding grammatical ranks. As Figure 9-2 shows, since semantics and lexicogrammar are different strata, it is possible to choose ‘incongruent’ (i.e., metaphorical) realizations.

In Figure 9-2, for example, *displacements of various kinds* is metaphorically realized by a nominal group (nominalization) instead of its congruent form, clause. We can **unpack** this nominalization as follows:

(the particles) displace differently

In *displacements of various kinds*, a figure is metaphorically realized as a participant: A process (*displace*) is realized by a nominal group (*displacement*) and circumstance (*differently*) is realized by a prepositional phrase as Qualifier² that modifies *displacement (of various kinds)*. These are examples of **rankshift** where a phenomenon in semantics shifts to the same or lower rank in lexicogrammar. The ‘shift’ may occur with a **fusion**: *displacements* in *displacements of various kinds* is a fusion of process and participant (thing). Thus, *displacement* is not a mere thing but ‘process + thing’. Figure 9-3 shows congruent realizations between semantics and lexicogrammar.

semantics			lexicogrammar	rank
sequence			clause complex	
figure			clause	
element	participant	thing	participant	nominal group
		quality	(part of) participant	adjective group
	process		process	verbal group
	circumstance		circumstance	prepositional phrase/ adverbial group
	relator		conjunctive	conjunction group

Figure 9-3: Ranks and grammatical classes in semantics and lexicogrammar

Shift and fusion are essential in grammatical metaphor. Certain areas such as science and bureaucratic documents deploy grammatical metaphor and those who are not familiar with these texts need to unpack grammatical metaphors. However, as the unpacking texts in this section show, it is sometimes difficult to unpack metaphorically realized texts. In addition, as the examples show, unpacked texts are often clumsy and unnatural. Furthermore, we often have difficulty in deciding whether or not a wording is metaphorical (for example, in the wave text, *the nature of the wave* might be metaphorical). Nonetheless, grammatical metaphor is a powerful tool to construing experience, interacting with each other and organizing message.

10. Other aspects of language

Parts 1–3 of this series of papers discuss the grammar of clause from the perspective of experiential,

interpersonal and textual metafunctions. There are two aspects that are not discussed: Below the clause and above the clause. Both of these relate to logical metafunction. For below the clause, Washitake (2022a) and Washitake (2022b) discuss the organization of nominal groups in scientific writings in English. For above the clause, Washitake (2021) explores clause complexes in various textbooks in English.

Appraisal is another aspect that this paper has not mentioned. It is concerned with evaluation system in language and thus it is mainly deals with interpersonal meaning. Martin and White (2005), for example, introduces Appraisal in English. Martin and Rose (2007: 25–71) also illustrates how people’s feeling, judgement and value are expressed. Typically, Appraisal spread out the whole text. Thus, in order to understand how evaluations work in text, we need to explore throughout the text.

Since the main purpose of this series of papers is the grammar of the clause and the space is limited, this paper will leave the discussions of these issues aside.

11. Conclusion

This series of papers have discussed SFL as a useful tool for analyzing text. The significance of SFL lies in language as a system network (meaning potential), multifunctional approach and stratification. By using SFL, researchers can analyze different strata of context and language (from culture and social purpose to wording and morpheme); different meanings of language (ideational, interpersonal and textual); different volumes of texts (from a whole text to a word); and different modes of text (for multimodal text analysis, see e.g., O’Halloran (ed.), 2004; O’Halloran, 2005; Baldry and Thibault, 2006; Kress and van Leeuwen, 2006; and Bateman, 2008). Since SFL takes social interaction as the subject of research, SFL researchers observe authentic texts in certain contexts.

With these implications, SFL is designed for application. Halliday’s (1994: xxix–xxx) enumerate applications of linguistics³:

- to understand the nature and functions of language;
- to understand what all languages have in common (i.e., what are the properties of language as such), and what may differ from one language to another;
- to understand how languages evolve through time;
- to understand how a child develops language, and how language may have evolved in the human species;
- to understand the quality of texts: why a text means what it does, and why it is valued as it is;

to understand how language varies, according to the user, and according to the functions for which it is being used;

to understand literary and poetic texts, and the nature of verbal art;

to understand the relation between language and culture, and language and situation;

to understand many aspects of the role of language in the community and the individual: multilingualism, socialization, ideology, propaganda, etc.;

to help people learn their mother tongue: reading and writing, language in school subjects, etc.;

to help people learn foreign languages;

to help train translators and interpreters;

to write reference works (dictionaries, grammars, etc.) for any language;

to understand the relationship between language and the brain;

to help in the diagnosis and treatment of language pathologies arising from brain insults (tumours, accidents) or from congenital disorders such as autism and Down's syndrome;

to understand the language of the deaf (sign);

to design appliances that will aid the hard of hearing;

to design computer software that will produce and understand text, and translate between languages;

to design systems for producing and understanding speech, and converting between written and spoken text;

to assist in legal adjudications by matching samples of sound or wording;

to design more economical and efficient means for the transmission of spoken and so on.

SFL is a useful tool for exploring language and social context because it considers language to be meaning potential; it understands language as multi-strata and multifunctional model; and it allows researchers to analyze language and its context in one framework.

Notes

- 1 Part 1 and 3 are published in *The Journal of Aichi Gakuin University: Humanities & Sciences* Vol. 71 No. 1, 2 (combined issue); and Part 2 is published in *Foreign Language & Literature* Vol. 49 No. 1 (Foreign Language Institute, Aichi Gakuin University)
- 2 Nominal groups consist of one or more following components: Deictic, Numerative, Epithet, Classifier and Thing. For example:

text	those	two	splendid	old	electric	trains
function	Deictic	Numerative	Epithet	Epithet	Classifier	Thing
grammatical class	determiner	numeral	adjective	adjective	adjective	noun

(adapted from Halliday, 2014: 364)

3 Unfortunately, this insightful enumeration has been omitted in the 3rd edition.

References

- Baldry, A. and Thibault, P. J. (2006) *Multimodal Transcription and text Analysis: A Multimedia Toolkit and Coursebook*. London: Equinox.
- Bateman, J. A. (2008) *Multimodality and Genre: A Foundation for the Systematic Analysis of Multimodal Documents*. New York: Palgrave Macmillan.
- Bernstein, B. (1996, 2000) *Pedagogy, Symbolic Control, and Identity: Theory, Research, Critique* (Revised edition). Lanham, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers.
- Butt, D., Fahey, R., Feez, S. and Spinks, S. (2012) *Using Functional Grammar: An Explorer's Guide* (3rd edition). South Yarra: Palgrave Macmillan.
- Kress, G. and van Leeuwen, T. (2006) *Reading Images: The Grammar of Visual Design* (2nd edition). London and New York: Routledge.
- Kwon, K. 'Clues to Collapse' *Scientific Americans*, January 2021. p. 17.
- Halliday, M. A. K. (1974, 2007) 'Language and Social Man' in *Language and Society. Collected Works of M. A. K. Halliday, Vol. 10*. Edited by Jonathan Webster. London: Continuum, 65–130.
- Halliday, M. A. K. (1975a, 2007) 'Aspects of Sociolinguistic Research' in *Language and Society. Collected Works of M. A. K. Halliday, Vol. 10*. Edited by Jonathan Webster. London: Continuum, 203–218.
- Halliday, M. A. K. (1975b, 2007) 'Language as Social Semiotic: Towards a General Sociolinguistic Theory' in *Language and Society. Collected Works of M. A. K. Halliday, Vol. 10*. Edited by Jonathan Webster. London: Continuum, 169–201.
- Halliday, M. A. K. (1997a, 2003) 'Linguistics as Metaphor' in Halliday, M. A. K. (2003) *On Language and Linguistics. Collected Works of M. A. K. Halliday, Vol. 3*. Edited by Jonathan Webster. London: Continuum, 248–270.
- Halliday, M. A. K. (1997b, 2002) 'Text as Semantic Choice in Social Contexts' in *Linguistic Studies of Text and Discourse. Collected Works of M. A. K. Halliday, Vol. 2*. Edited by Jonathan Webster. London: Continuum, 23–81.
- Halliday, M. A. K. (1978) *Language as Social Semiotic: The Social Interpretation of Language and Meaning*. London: Edward Arnold.
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar* (2nd edition). London: Arnold.
- Halliday, M. A. K. (2004) *The Language of Science. Collected Works of M. A. K. Halliday, Vol. 5*. Edited by Jonathan Webster. London: Continuum.
- Halliday, M. A. K. and Hasan, R. (1985) *Language, Context and Text: Aspects of Language in a Social-semiotic Perspective*. Victoria: Deakin University.
- Halliday, M. A. K. and Martin, J. R. (1993) *Writing Science: Literacy and Discursive Power*. London: Falmer Press.

- Halliday, M. A. K. and Matthiessen, C. M. I. M. (1999) *Construing Experience through Meaning: A Language-based Approach to Cognition*. London: Cassell.
- Hasan, R. (1984, 1996) 'The Nursery Tale as a Genre' in *Ways of Saying: Ways of Meaning: Selected Papers of Ruqaiya Hasan*, 51–72.
- Martin, J. R. (1992) *English Text: System and Structure*. Amsterdam: John Benjamins.
- Martin, J. R. and Rose, D. (2007) *Working with Discourse: Meaning beyond the Clause* (2nd edition). London and New York: Continuum.
- Martin, J. R. and Rose, D. (2008) *Genre Relations: Mapping Culture*. London: Equinox.
- Martin, J. R. and White, P. R. R. (2005) *The Language of Evaluation: Appraisal in English*. New York: Palgrave Macmillan.
- O'Halloran, K. K. (ed.) (2006) *Multimodal Discourse Analysis: Systemic-Functional Perspectives*. London and New York: Continuum.
- O'Halloran, K. L. (2005) *Mathematical Discourse: Language, Symbolism and Visual Images*. London and New York: Continuum.
- Poynton, C. (1989) *Language and Gender* (2nd edition). Oxford: Oxford University Press.
- Rose, D. and Martin, J. R. (2012) *Learning to Write, Reading to Learn: Genre, Knowledge and Pedagogy in the Sydney School*. London: Equinox.
- Thompson, G. (2014) *Introducing Functional Grammar* (3rd edition). London and New York: Routledge.
- Washitake, M. (2021) 'Toward Academic Reading (II): Untying Intricate Clause Complexes and Nominal Groups and Grasping "Things"' *The Journal of Aichi Gakuin University Humanities & Sciences*, 68(1, 2, 3), 27–42.
- Washitake, M. (2022a) 'Reading Materials for Learning to Read Scientific Papers: A Suggestion from a Systemic Functional Perspective' *The Journal of Aichi Gakuin University: Humanities & Sciences*, 69(1, 2), 19–34.
- Washitake, M. (2002b) 'Reading Popular Science Magazines: A Systemic Functional Perspective on Choosing Teaching Materials toward Academic Reading' *Foreign Languages & Literature*, 47(1), 3–19.
- Young, H. D. and Freedman, R. A. (2016): *Sears & Zemansky's University Physics with Modern Physics* (14th edition). Harlow: Pearson.
- Imendis explabore velliquis commienis dolorum quibusdant ent res pe nimus ad qui cume sin rendis et quatet arit et quam estin exceperum inimus duntias et fugit quidignis eruptatorit et, sent aped unt quuntem sint utati asinvention nam, omnihici unt vendentia nossequi ut ilitemosam res eossequis dolore sequi alicium que elibearum aut est, ellore, sae andit ut magnatem nonsequas derum sam, commodi ut modist, omnihte excearum et a vent.
- Sequi verum excerat. Bea cus, ipietur?
- Ebis doloremquam nis discimusant de dent la aped magnam, int ut utas consequi verumet quiate pe vidunt osaerias volo voluptatem qui corepudae namus magnim expe rem quas ut ommo ducipsame se volorrora ad et et occum, voluptat.
- Bo. Namusantiure voluptat officiis ducil escietur?
- Sint quiae sum num venim vit offici dit officia sit est, conessit des voloremmod ut qui qui des serorum aut odipistrum quatemque volume pro idendan daestibusae voluptatem voluptatqui consequis reperchicia voluptatur, solendi odi dolorem nobisimus etuscit iscidebiti doluption cor auda voluptati renis nam aborruptatiterum site officiet voluptas eat omnis nulpuru ptamus reperemperro illignam aut dellacestis nam ente molor solupta speritem erion rerrum doluptatas elitit venis sumquidus mo quam eos aut expelita veligni musanto ipitior eresed quidiscia cus, odit, excus dolum se dolupti buscipidebis volupta spedita tibusdae porestis excerore nam is voluptur?
- Ficipsam estrunt haritae rem untiur, sequi debet ulparchil in consed ea voluptae aspe quo minullam dolutas cus, et molum

quis dolut ius, totaquis aut facculat laccull andaeperum, omnihit officita dit, sit, a doloriore entio que plabor mil
ipitaquas volorro blania velique voluptatur simaximusam expe velique nem lat et utem doluptatiis voluptatem il magnam
ento iuntectati utatur?

Hentiis alibusaerrum accatur? Quiduntint.

Itat fuga. Itatio test explabo. Escit, nihici dersperia quate es sus, archit aut as simi, eatur, occum ut que nos volenti doluptaquo

執筆者紹介

山口 均 (本学名誉教授……………英米文学)
YAMAGUCHI Hitoshi

山名 賢治 (本学准教授……………化学)
YAMANA Kenji

中野 博文 (愛知教育大学教育学部教授)
NAKANO Hirofumi

鷲嶽 正道 (本学教授……………英語)
WASHITAKE Masamichi

教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 鷲 嶽 正 道 (副会長) 糸 井 川 修

(会計)※南 裕 明

内 田 康 弘 ※海 野 勇 三 ※澤 田 真由美

柴 田 哲 雄 白 木 優 馬 菅 井 大 地

※菅 原 研 州 中 村 綾 山 名 賢 治

※本号編集委員

編 集 後 記

教養部紀要第72巻第1号をお届けいたします。第1号を本来の時期である初秋に発行するのは6年ぶりだそうです。令和になって初めてのこととなります。長年ご尽力いただいている出版社あるむのご担当者様、またご協力いただいたすべての皆様に心より御礼申し上げます。(澤田記)

愛知学院大学教養教育研究会会則

- 第 1 条 本会は愛知学院大学教養教育研究会と称する。
- 第 2 条 本会の事務所は愛知学院大学教養部に置く。
- 第 3 条 本会は大学設立の趣旨に則り、人文科学・社会科学・自然科学・語学・健康総合科学等の、教養教育に関する諸学の研究成果ならびに教育成果の発表を通じ、学問の水準を維持、向上せしめ教育及び社会一般に寄与することを目的とする。
- 第 4 条 本会の会員は次の通りとする。
- (1) 正 会 員 本大学の教養部専任教員とする。
 - (2) 準 会 員 本大学の在学生とする。
 - (3) 賛助会員 本大学の卒業生及び本会の趣旨に賛同し、会長の承認を得た者とする。
- 第 5 条 本会は第 3 条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 機関誌「愛知学院大学論叢教養部紀要」の刊行
 - (2) 研究会、講演会、討論会等の開催
 - (3) その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業
- 第 6 条 「愛知学院大学論叢教養部紀要」は原則として毎年 3 回発行し、会員に配布する。
- 第 7 条 本会は教養教育研究会委員会を置き、委員は次の者で構成する。
- (1) 会 長 1 名
 - (2) 副 会 長 1 名
 - (3) 委 員 12 名
 - (4) 会 計 1 名
- 2 会長は学長これを委嘱する。
 - 3 委員は正会員の互選により、人文科学・社会科学・自然科学・第 1 外国語・第 2 外国語および健康総合科学の各系列より 2 名あて選出する。委員の任期は 2 年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 4 副会長及び会計は委員の互選により、会長がこれを委嘱する。
- 第 8 条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
- 2 副会長は会長を補佐し、会務を掌る。
 - 3 委員は委員会を構成し、本会の企画運営にあたる。
- 第 9 条 会長は委員会を招集し、その議長となる。
- 第 10 条 会長は本会の会務執行のため、必要あるときは実行委員会を委嘱することがある。
- 第 11 条 会員は毎年度始めにおいて会費を納入する。
- 2 新入会員は入会金を納付するものとする。
- 第 12 条 本会の運営費は、会員の納付する会費、愛知学院大学からの補助金または有志からの寄付金およびその他の収入をもってこれにあてる。
- 第 13 条 本会の会計は 4 月に始まり、翌年 3 月に終る。
- 第 14 条 本会の会則の改正は正会員の 3 分の 2 以上の賛成をもって成立する。
- 付 則

本会則は、昭和32年4月1日に制定し、即日施行する。

本会則は、昭和53年2月6日に改正し、即日施行する。

本会則は、昭和57年3月24日に改正し、同年4月1日より施行する。

本会則は、昭和58年6月17日に改正し、即日施行する。
本会則は、昭和63年4月1日に改正し、即日施行する。
本会則は、平成2年7月6日に改正し、同年4月1日より施行する。
本会則は、平成8年7月19日に改正し、即日施行する。
本会則は、平成11年12月17日に改正し、翌年4月1日より施行する。
本会則は、平成20年12月12日に改正し、翌年4月1日より施行する。
本会則の施行により愛知学院大学一般教育研究会会則を廃止する。
本会則は、平成27年4月1日に改正し、即日施行する。

愛知学院大学論叢「教養部紀要」投稿規程

1988年4月1日成立・実施

〔投稿資格〕

第 一 条 この会誌に投稿する資格をもつ者は、原則として教養教育研究会正会員とする。

〔転載の禁止〕

第 二 条 他の雑誌に掲載された論文・資料・翻訳・書評などは、これを採用しない。

〔原稿の形式〕

第 三 条 投稿に際しては、次の要領に従って本文、図および表を作成する。

- (1) 原稿は、電子媒体による入稿とする。(プリントアウトを1部添付する)
- (2) 原稿の量はおおむね16,000字以内とする。
- (3) 本文の前に、別紙で、次の3項を次の順序で付する。
 - (i) 和文の題目および執筆者名。
 - (ii) 欧文の題目および執筆者名。
 - (iii) (イ) 論文・資料・翻訳・書評などの区別
(ロ) その論文・資料・翻訳・書評などが属する専門領域名。
ただし、ここにいる専門領域は、人文・社会・自然・外国語・健康総合科学の5部門に区別する。
 - (iv) 教授・准教授・講師・助教・外国人教師など別
- (4) 図・表・写真は、印刷するのに十分な画質のもの(原則としてモノクロ)を、本文の該当箇所

〔原稿の申込み〕

第 四 条 投稿希望者は、教養教育研究会委員会(以下、委員会と称す)の公示する期限までに、委員会の提示する申し込み用紙に氏名を記入する。

ただし、申し込み者が所定の数に達しないか、またはそれを越える場合には、委員会がこれを調整する。

〔提出期限〕

第 五 条 投稿は委員会の定める提出期限までにこれを行う。締切り日以後に提出された原稿は掲載されないことがある。

〔原稿組版の制限〕

第 六 条 図版・カラー写真などの掲載により一般の経費より多くかかる場合は、その必要性を各号の編集

責任者に申し出て委員会を開催して審議し、承認を得ることとする。なお、承認を得られず掲載を希望する場合、その費用を別途に個人負担とする。

〔原稿修正の制限〕

第 七 条 投稿後の原稿の修正は、原則としてこれを行わないものとする。やむをえない場合は初校において修正し、その範囲は最小限度にとどめる。大幅な修正の結果、印刷費が追加されるときは追加費用を個人負担とすることがある。

〔校 正〕

第 八 条 校正は原則として第 3 校までとし、本文については執筆者がこれに当たり、表紙・奥付その他については編集委員がこれに当たる。

〔抜き刷り〕

第 九 条 抜き刷りは、論文・資料・翻訳・書評など各 1 篇につき 50 部までを無料とする。これを越える分については実費を執筆者の負担とする。50 部以上を要する場合には、執筆者はその必要全部数を原稿の表紙に朱記する。

〔掲載論文等の複製権・公衆送信権〕

第 十 条 この会誌に掲載された論文等の電子化および公開に関わる複製権および公衆送信権は、教養教育研究会に属するものとする。

ただし、掲載された論文などの執筆者が他の機関への転載もしくは複製権または公衆送信権の行使を申し出た場合は、正当な理由がない限り、教養教育研究会はこれを拒むことはできない。

付 則

- 一、本規定の改正には、教養教育研究会正会員の 3 分の 2 以上の賛成を要する。
- 二、本規定は、1988 年 4 月 1 日に成立し、即日施行する。
- 三、本規定は、1996 年 7 月 19 日に改正し、即日施行する。
- 四、本規定は、1999 年 12 月 17 日に改正し、翌年 4 月 1 日より施行する。
- 五、本規定は、2003 年 11 月 21 日に改正し、即日施行する。
- 六、本規定は、2005 年 4 月 22 日に改正し、即日施行する。
- 七、本規定は、2007 年 11 月 16 日に改正し、即日施行する。
- 八、本規程は、2018 年 9 月 21 日に改正し、即日施行する。

申し合わせ（教養部会 2010. 7. 16）

- 第一条の「投稿する資格を持つ者」には、以下の非正会員を含む。
 - (1) 正会員との共同執筆による投稿
 - (2) 正会員が推薦する本学教養部の非常勤講師で、本務校をもたない人の投稿
 - (3) 元正会員で、本務校をもたない人の投稿
- 上記(1)(2)(3)に該当する投稿希望者がある場合は、担当編集委員が投稿の可否を決定し、投稿希望者に通知する。担当編集委員で判断できない場合には、教養教育研究会委員会を開いて投稿の可否を決定する。
- 投稿原稿の掲載に際しては、(1)の場合の原稿料は 1 篇分とし、(2)(3)の場合の原稿料は支払われない。また、(1)(2)(3)いずれの場合も抜き刷り 50 部までは無料とする。
- 投稿者は、第三条の〔原稿の形式〕を厳守し、第四条の〔原稿の申し込み〕の時に委員会の提示する「投稿票」用紙に必要事項を記入のうえ添付して投稿する。
- 投稿された原稿について担当編集委員から検討の申し出があった場合は教養教育研究会委員会を開き、委員会名において訂正を依頼したり投稿を断ることがある。

●第六条「図版・カラー写真の掲載」については、紀要作成予算の範囲内と見なされる場合、その採否は紀要編集委員の決議にゆだねるものとする。ただし、予算の範囲を逸脱する、あるいは採否の決議が困難の場合は教養教育研究会委員会を開催して、決定することとする。

(注) 教養教育研究会が本会正会員の著書・論文等について書評を依頼する場合は、原稿料を支払うこととする。

令和 6 年 9 月 20 日 印 刷
令和 6 年 9 月 30 日 発 行

(非売品)

愛知学院大学論叢
教養部紀要第72巻
第 1 号 (通巻第205号)

編集責任者
鷲 嶽 正 道

発行者 愛 知 学 院 大 学
教 養 教 育 研 究 会
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12
電 話 〈0561〉 (73) 1111 (代表)

印刷所 株 式 会 社 あ る む
電 話 〈052〉 (332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol.72 No.1
(Whole Number 205)

C O N T E N T S

Articles

Hitoshi YAMAGUCHI : Some Versions of *The Waste Land*..... (1)

Kenji YAMANA and Hirofumi NAKANO : Lewis Acid Promoted Dimerization Reaction
by 1,4-Addition Reaction of Trialkyl Phosphite to 1-phenyl-1*H*-pyrrole-2,5-dione (21)

Masamichi WASHITAKE : Systemic Functional Linguistics as a Useful Tool for Analyzing Text (Part 4)
..... (27)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2024